

日韓古代火葬墓の比較研究

－日本古代火葬墓の系譜をめぐって－

小田 裕 樹

- I. はじめに
- II. 研究史と問題の所在
- III. 分析の方法と資料
- IV. 分析－百済・新羅火葬墓の特質－
- V. 考察－日本古代火葬墓の系譜－
- VI. まとめ

要 旨 本稿では、日本の古代火葬墓の系譜を明らかにすることを目的に、韓半島の火葬墓について墓構造・分布・時期の点から様相を整理し、日本との比較をおこなった。百済では、骨蔵器に用いられる器種が少ない点、羅域内に火葬墓が分布する点の特徴であるが、従来考えられてきたよりも火葬は盛行していなかったとみられる。新羅では、新羅王京周辺に特殊な墓構造をもつ火葬墓が分布する点の特徴であり、地方では王京と異なる地域性がみられることを明らかにした。日本の火葬墓との関わりについて、百済の火葬墓は時期的な連続性に問題があり、積極的な評価はできない。一方、日本と新羅の間では、支配者層の火葬墓の墓構造を比較すると、両国共に独自の骨蔵器・埋納施設を採用しており、直接的な関係は見いだしがたい。しかし、両者の様相には、「仏教思想」と「律令制度」が共通の背景として存在していたことを見だし、その淵源は中国（唐）に求められる可能性が高いと考えた。日本の古代の火葬は、律令国家の成立期に中国からの先進文化の一つとして律令制度・仏教とともに受容し、律令国家にふさわしい葬法という位置づけで支配者層に採用されたものと考えられる。

キーワード 火葬墓 墓構造 都城の葬地 地域性 律令国家

I. はじめに

日本古代の火葬は『続日本紀』文武4年(700)の道昭の火葬記事を初現とし、その後、持統・文武天皇をはじめとする天皇・貴族が火葬され、奈良～平安時代を中心に盛行する。これは、現在までの発掘調査の成果をみても看取できる。

この日本古代の火葬墓について、黒崎直は「天皇喪葬を範として官人・貴族層が追随した」墓制であると位置づけた¹。近年の研究では、火葬導入の意義について、律令国家成立期に新たな墓制を模索した支配者層の政治的意図と関連して評価されている²。

しかし、日本古代の支配者層がなぜ火葬を採用したのか、についての説明は従来十分におこなわれていない。日本における火葬導入の歴史的意義を明らかにすることは、律令国家の墓制に対する位置付けや国家理念など、東アジアにおける日本古代律令国家の特質を探る上で重要な手がかりになると考えられる。この問題を明らかにするためには、当該期の東アジアの中で、火葬がいかなる位置づけにあるのか、どのような過程を経て日本が受容するに至るのかについて明らかにする必要がある。

本稿では、日本の古代火葬墓について、その系譜を明らかにすることを目的とし、韓半島の火葬墓との比較をおこない、その淵源についての考察を試みる。

なお、本稿で扱う火葬とは仏教思想を背景とし、納棺→荼毘→拾骨→蔵骨の一連の儀礼³を経て造墓された墓のことを言い、拾骨が認められない縄文時代の火葬やいわゆるカマド塚⁴とは区別する。

II. 研究史と問題の所在

1. 日本古代火葬墓の系譜に関する研究史

日本の火葬墓の系譜についての見解は、大きく3つの説に分けることができる。(1)百済、(2)新羅(統一新羅)、(3)中国(唐)の3説である。

(1) 百済説

姜仁求は日本における火葬墳墓制度は百済からまず伝授されたものとし、日本へ渡った百済人によって広く流布したと考える⁵。藤沢一夫は中国からの影響を考えつつも、扶余周辺の出土例から日本の火葬墓との共通性を評価した⁶。小田富士雄は、西日本の火葬墓について、百済の火葬墓との親近性が存在すると指摘した⁷。山本孝文は、百済と日本の骨蔵器⁸の類似から、日本の火葬が百済滅亡を契機とし、日本へ渡った集団が九州や近畿地方に火葬風習と骨蔵器を伝えたとした⁹。

これらの説は、日本の骨蔵器に多くみられる須恵器短頸壺(壺A)¹⁰と百済における有蓋短頸壺の形態的類似を根拠とし、百済系渡来人による火葬の伝播を想定する。

(2) 新羅（統一新羅）¹¹説

網干善教は火葬導入に関する先行研究を詳細に検討した上で批判を加え、新羅仏教や文武王の火葬など、新羅からの影響を考えた¹²。新羅からの影響とする説には、金子裕之も賛同する¹³。

これらの説は、文献記事や古代史側の研究動向を踏まえ、当該期の頻繁な日羅交渉の存在や、新羅仏教と日本仏教との関わり、日本古代の政治・文化への新羅の影響が明らかにされてきたことを背景とし、その一環として火葬の伝播を理解するものである。

(3) 中国説

日本の古代墳墓について先駆的な研究をおこなった森本六爾は、奈良時代の墳墓について唐朝文化の波及によるものとした¹⁴。斉藤忠は、新羅の火葬墓の様相をふまえた上で、火葬は薄葬と仏教思想の浸潤によって、中国から日本に伝播したと考え、それに先んじて新羅の文武王も「西国の式」によって火葬されたものと理解した¹⁵。また、藤沢一夫は百済と共に、中国の南朝からの影響を考え¹⁶、小田富士雄も火葬の淵源は中国にあると指摘する¹⁷。

近年も森本徹は斉藤忠の説を支持し、日本・百済・新羅における火葬墓の出現は唐を起源とし、各地域で発展したものと¹⁸、奥村茂輝も、当該期の仏教受容の様相を整理した上で、入唐僧による知識が契機となった可能性を考える¹⁹。

これらの説は、当該期における遣唐使や入唐僧による唐の先進文化の受容の一環として火葬を受容したものと理解する。ただし、中国では火葬が普及せず、資料的にも火葬墓が発掘調査された事例はほとんどなく、僧侶に限定された葬法²⁰と評価されること、火葬導入の時期には唐との関係悪化や、遣唐使の中断などにより直接的な交渉関係がなかったとみられることから、中国と日本の火葬における直接的な関係については明らかではない。

以上をみると、日本の古代火葬墓の系譜について、考古学的に系譜関係を検討したものは、百済説の有蓋短頸壺と日本の壺Aとの関連のみで、古代史・仏教史の研究成果に基づく説が主であり、考古資料に則した検証が必要といえる。

2. 韓国の古代火葬墓に関する研究史

次に、本稿で検討対象とする韓国の火葬墓研究について概観する。

(1) 百済の火葬墓研究

斉藤忠は、扶余周辺で出土した有蓋短頸壺の資料紹介の中で、錢貨が副葬された事例などをもとに、これを火葬骨蔵器と評価した²¹。姜仁求は扶余周辺の出土事例から、骨蔵器の埋置形態や副葬品の配置など、火葬墓の構造パターンを二重盃式、心壺多盃式、単盃式、内壺外甕式、倒甕式、単壺式、外壺内壺式の7類型に分類した²²。山本孝文は、従来百済の火葬墓とされてきた中に、統一新羅期の火葬墓が含まれることを指摘した上で、姜仁求の

いう単壺式・単椀式が百濟火葬墓の典型であり、被葬者は僧侶が中心であったと評価し、泗泚都城との関係、日本の火葬墓との関係も含め、再検討をおこなった²³。

(2) 新羅の火葬墓研究

斉藤忠は、慶州周辺で収集された骨蔵器を集成し、出土状況・形態・文様の特徴についてまとめた²⁴。鄭吉子は収集資料も含めて印花文骨蔵器の分類・編年をおこない²⁵、宮川禎一も印花文土器の編年研究の一環として、連結把手付骨壺の編年をおこなった²⁶。洪漣植は統一新羅の葬・墓制を概説する中で、石室墳と火葬墓との関係に言及し、火葬墓の構造については二重型・単一型に分類した²⁷。また、自身の印花文土器の編年研究をふまえ²⁸、連結把手付骨壺の編年を再検討し、火葬墓の年代を従来より大幅に新しく考える見解を提示した²⁹。亀田修一は、統一新羅の概説の中で火葬墓についてふれ、王京・地方の違いを指摘した³⁰。金鎬詳は慶州錫杖洞遺跡の発掘調査をふまえ、慶州周辺の火葬墓の構造を分類し³¹、石秉哲も、発掘調査資料や文献記事をもとに、慶州周辺の火葬墓の構造を再分類し、火葬墓の展開や造営背景について考察した³²。洪漣植は、墓の構造の分類や新たな年代観をふまえ、新羅の火葬墓は、8世紀中葉以降、9世紀代を中心に盛行するとし、火葬墓の展開は舍利容器の変化と不可分で、王・貴族の舍利信仰が反映するとした³³。さらに、王京と地方の火葬墓について墓の構造の差異を見出し、王京型火葬墓と地方型火葬墓の存在を提起した³⁴。車順喆は、研究史と慶州周辺の火葬墓の整理をおこない、墓構造に階層差が現れていることを指摘し、火葬墓の展開にともなう思想的変化を指摘した³⁵。

以上のように、韓国の火葬墓研究は、収集資料に基づく基礎的研究から、発掘調査資料の蓄積を踏まえ、火葬墓の構造の分析や王京と地方など地域間比較がおこなわれている段階にある。ただし、現状では百濟（扶余周辺）・新羅（慶州周辺）を中心とする個別地域を対象とする研究が主であり、洪漣植の王京・地方における火葬墓の造営層やその背景に関する研究³⁶のように、韓半島全体を視野に入れ、階層性・地域性の整理をおこなった上で火葬墓の特質を明らかにする研究が必要といえる。

3. 日韓古代火葬墓の比較に関する研究史

小田富士雄は、西日本と百濟・新羅の火葬墓の様相を比較し、百濟と新羅の相違や、日本において金銅製骨蔵器や墓誌が見られる点が特徴であることなど、各地域の特徴を指摘した³⁷。

また、森本徹は日韓両地域における古墳と火葬墓との併存関係に着目し、火葬墓の導入様相の比較から、従来の墓制に火葬墓が新式の墓制として加わり、両者が併存する韓半島と、古墳の築造が終了した上で新たな墓制として火葬が導入された日本という相違点を見出し、日本における火葬導入がより政治的な意図をもっておこなわれたものと評価した³⁸。

森本の研究は、両国の様相の比較から、古墳の終焉と火葬導入における特殊性や日本の

火葬墓の特質について論じており、注目すべき成果といえる。しかし、森本の研究では、対象とした資料数が限られていた点、古墳との併行関係に注目したため、火葬墓そのものについての検討があまりおこなわれていない点に課題が残り、近年の資料の増加をふまえて再度検討をおこなう必要がある。

4. 問題の所在

日本の古代火葬墓の系譜について、従来3つの説が提起されているが、百済の有蓋短頸壺と日本の壺Aとの間に系譜関係を求める以外に考古学的な検討はおこなわれておらず、近年の資料の蓄積をふまえた上で考古学的に諸説の検証をおこなう必要がある。

韓国の火葬墓研究では、個別地域内を対象とした研究から、韓半島全体を対象とした墓の構造に関する研究や地域間比較がおこなわれている段階にあり、日本の火葬墓との比較研究が可能な状況にあるといえる。

本稿では、日本の古代火葬墓の系譜について諸説の検証をおこなうために、まず韓半島の火葬墓資料を集成し、韓半島における火葬墓の特質について整理をおこなう。次に、日本の古代火葬墓の様相との比較をおこない、両者の系譜関係について検討する。

Ⅲ. 分析の方法と資料

1. 分析の方法

考古資料としての火葬墓は、「納棺・荼毘・拾骨・納骨などに関わる様々な葬送儀礼の最終的な痕跡」³⁹として、骨蔵器の選択や埋納方法、祭祀行為の痕跡などの諸属性の集合として把握できる。

本稿では、分析にあたり「墓構造」に関わる属性を主な対象とする。「墓構造」とは、骨蔵器および骨蔵器の外容器や埋納施設を含めた属性のあり方とその組み合わせとし、骨蔵器の選択に関わる属性と骨蔵器を埋納する施設の構築に関わる属性の同一遺構内での同伴関係として把握される。これに、火葬墓の立地・分布や他の遺跡との関係などを含めて分析を進める。

分析では、百済・新羅それぞれの墓構造・分布・時期に関する特徴を整理する。その後、日本の古代火葬墓との比較をおこない、上記の日本古代火葬墓の系譜に関する諸説について検証したい。

なお、韓半島と日本との間には支配者層から民衆まで、様々なレベルでの交渉が想定できるが⁴⁰、本稿では、主に支配者層レベルを対象として、火葬の系譜関係について検討を進めたい。

2. 資料

分析の対象とする資料は、韓半島における6～9世紀の火葬墓資料101例である（第4

表、第10～19図)。発掘調査資料の集成に努めたが、一部発掘調査によらない資料を含めている。なお、韓半島では人骨が出土する事例が少なく、確実に墓とは判断できない資料も多い。特に、建物跡から出土する土器については、火葬墓とされてきたものが地鎮具・鎮壇具として再評価されている⁴¹。従来火葬と評価されてきた資料の中で、地鎮具・鎮壇具と判断したものは外したが、性格比定が困難なものや、特記すべきものについては本文中で説明を加える。

また、年代的位置づけについては、李東憲の印花文土器の編年案⁴²に依拠する。印花文土器以外の土器の年代観については、基本的に報告書の記載に従うが、変更のある場合は文中で記述している。

IV. 分 析－百済・新羅火葬墓の特質－

1. 百済の火葬墓

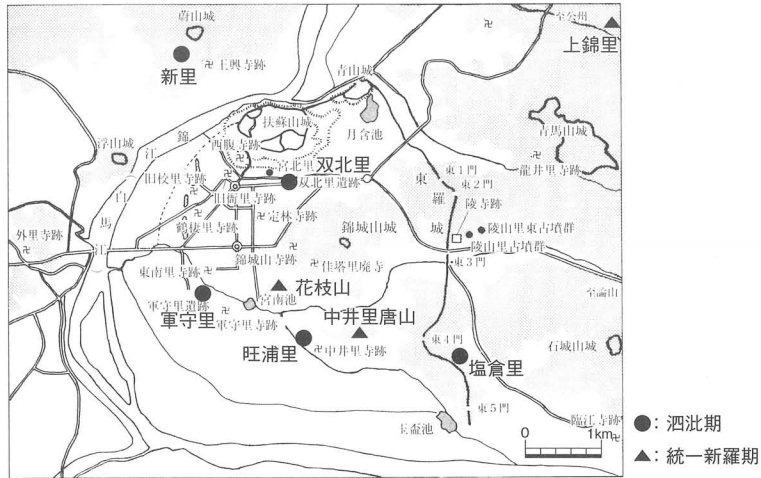
百済の火葬墓は姜仁求により報告されているが⁴³、扶余周辺の「百済火葬墓」は、骨蔵器の器種が有蓋短頸壺または有蓋盒と少ない点の特徴で、特別な骨蔵器埋納施設を設けない素掘土坑が多いようである（第10図）。

なお、姜仁求が挙げた事例の中で、扶余中井里唐山遺跡例など、土器の形態からみて統一新羅期に位置付けられるものがある⁴⁴。これらは、扶余上錦里遺跡・同花枝山遺跡と共に、統一新羅期における地方の火葬墓のあり方を示す事例として再評価する必要がある。

また、従来百済の火葬墓の典型として評価されてきた事例についても、扶余双北里遺跡や同軍守里遺跡出土の有蓋短頸壺は出土状況や周辺の遺構との関係が不明であり、建物や寺院に関係する地鎮具や鎮壇具の可能性が残る。斉藤忠は扶余出土の有蓋短頸壺について、銭貨の副葬を根拠として、日本の火葬墓にみられる銭貨の副葬例との類似から、火葬墓の可能性を考えている⁴⁵。確かに、古代火葬墓から銭貨が出土する事例は多く見られるが⁴⁶、土器内に銭貨を納める例は地鎮具・鎮壇具、胞衣壺などの例があり⁴⁷、必ずしも火葬墓のみに限定できず、慎重な判断が必要である。

次に、分布をみると、火葬墓は百済の泗泚期の都城である扶余地域周辺に集中する（第1図）。この中で、羅城内に分布する事例があり、都城と墓との関係を考える上で重要である。日本の藤原京・平城京では、都城内で確実な墓は調査されておらず⁴⁸、これは都城内での埋葬を禁じた「喪葬令」皇都条との関連で理解されている⁴⁹。後述の新羅でも王京外に墓地が設けられていたと判断されることから、百済の様相は日本や新羅とは異なる可能性がある。

扶余の泗泚城では、王陵と推定される陵山里古墳群が羅城の東に立地し、隣接して陵寺（陵山里寺）が位置する。これらは、泗泚城内外の空間構成の中で、王陵と寺院が計画的



第1図 扶余周辺の火葬墓分布

に配置されていたものと理解できる。これに対し、城内に火葬墓が存在する点は特異であり、これを城内の寺院との関連をもって僧侶の火葬墓と理解する説⁵⁰もある。しかし、羅城内の墓地の存在は火葬墓のみならず泗泚期百済の都城制の特質を考える上でも重要な問題となることから、火葬墓とみるか地鎮具・鎮壇具など他の性格の遺構と評価するか、慎重な判断が必要である。今後の城内での発掘調査の進展に期待したい。

また、扶余以外の地域では、羅州伏岩里3号墳17号石室内（7世紀前葉）の事例がある。これは、石室羨道内で瓦形土製品を組み合わせた間に火葬骨を置いていた。伏岩里3号墳では3世紀中葉以降、甕棺墓・横穴式石室と連続的に造墓がおこなわれており、その最終段階において火葬墓が採用されている。これは、伝統的墓制の中に新式の墓制が挿入された様相と見ることができ、百済における火葬受容の様態を示す事例として、注目される。なお、百済末期と報告された全州中華山洞火葬墓は、蓋の形態からみて統一新羅期の火葬墓とする見解⁵¹を支持する。

以上みたように、百済の火葬墓は従来考えられてきたよりも、確実な火葬墓と判断できる事例はごく少数であり、現在の資料状況からは百済で火葬が盛行していたという評価は難しく、非常に限定的な範囲で受容されたものと考えられる⁵²。

2. 新羅の火葬墓

(1) 墓構造の分類と年代・分布

まず、墓構造の分類をおこなう。骨蔵器には、材質として施釉陶器（唐三彩・緑釉陶器・青磁）、陶質土器（印花文土器を含む）、軟質土器、木質や繊維（布）などの有機質があり、器種では短頸壺、連結把手付壺、鉢、椀、甕がある。このうち、緑釉陶器・印花文土器の短頸壺や連結把手付壺は骨蔵器専用の容器として作られた可能性が高く、椀・甕

は日常容器の転用と考えられる。また、骨蔵器をおさめる外容器として、石櫃や連結把手付壺などの専用容器と、陶質・軟質甕などの日常容器の転用がある。骨蔵器埋納施設として、小石室などを構築するものおよび素掘土坑がある。

これらの属性の組み合わせから、墓構造を分類する（第1表）。分類にあたっては、洪漕植の分類⁵³をふまえ、以下のように分類した。

A1： 石櫃・連結把手付壺（専用外容器）×専用容器・中国産陶磁器

A2： 壺・椀（転用外容器）×日常容器類（壺・甕・椀など）

B1： 小石室×日常容器類（壺・甕・椀など）

B2： 素掘土坑×日常容器類（壺・甕・椀など）

A型は骨蔵器を外容器に納めるもので、洪漕植の二重型、B型は単一型に該当する。洪漕植が石棺形としたものはいわゆる小石室と考えた。また、B型は骨蔵器の器種により、印花文土器短頸壺（専用容器）、壺類、甕類、椀類とさらに細分可能である。

次に、火葬墓の造営年代をみると、7世紀後半から9世紀前半が主体であり、8世紀代を中心に盛行するといえる。また、慶州東川洞遺跡・昌寧友江里遺跡など一部6世紀代に遡るとされる事例がある。これらは火葬骨の出土が無く、確実な火葬墓とは言い難いものの、これを火葬墓と認めるならば、印花文土器壺や、連結把手付壺など新羅の火葬墓を特徴付ける専用容器が出現する以前から、独自の容器（盒形容器）や転用容器を用いた火葬墓が造られていたと評価できる。

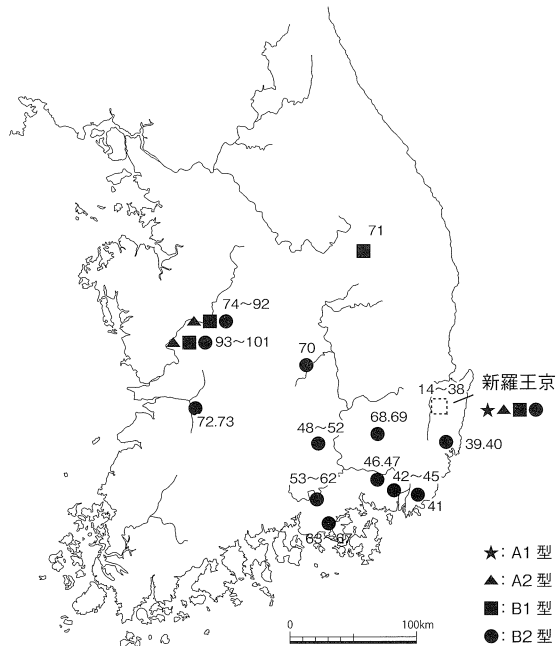
分布についてみる（第2図）。新羅の王京（慶州盆地）周辺に集中する他、現状では慶尚北・南道、忠清南道に多く分布する。墓構造の各類型をみると、新羅王京周辺にA1・A2・B型が分布し、王京以外ではB2型が中心で、一部A2・B1型の分布がみられる。

以下では新羅王京周辺と王京以外の地方とに分けて記述する。

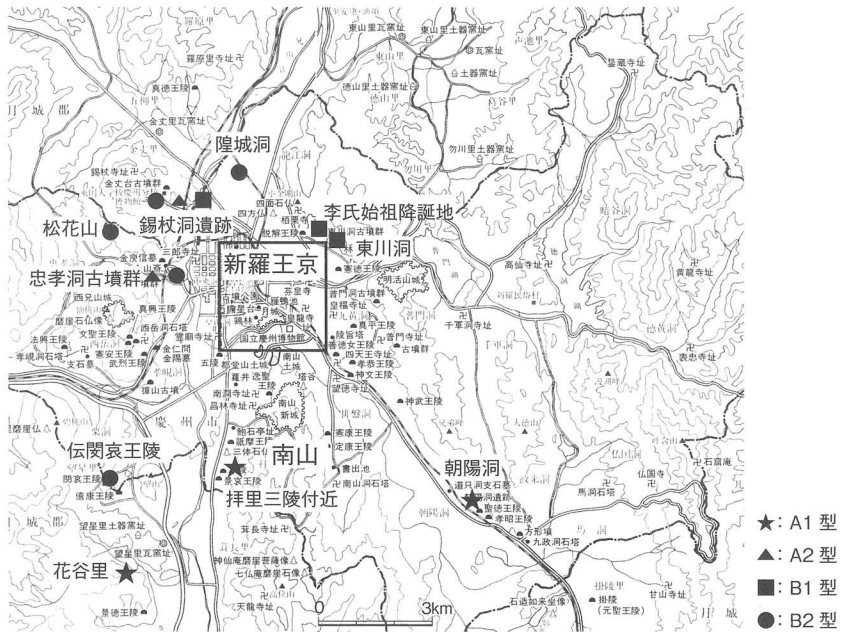
(2) 新羅王京周辺の火葬墓

まず、新羅王京内⁵⁴の火葬墓とされる事例について検討する。

雁鳴池下層出土骨蔵器については、報告書では骨壺と報告し⁵⁵、鄭吉子も火葬墓として取



第2図 新羅の火葬墓分布（番号は資料番号に対応）



第3図 新羅王京周辺の火葬墓分布

り上げたほか、亀田修一も王宮以前に存在したとする天柱寺との関係で理解している⁵⁶。

一方、これらを鎮壇具とする崔恩娥の説⁵⁷がある。筆者は、月城周辺において同時期の埋葬遺構が他に見つかっていない点、近接する皇南洞123-2番地遺跡や皇龍寺、王京S1E1地区で多数の鎮壇・地鎮遺構が見つまっていることなどから、同様の性格のものとして、雁鴨池下層出土骨蔵器を臨海殿など王宮の整備に関わる鎮壇具・地鎮具とする説を支持したい。

また、皇南大塚の封土中から出土した統一新羅期の土器を火葬墓とする見解もある⁵⁸。これを火葬墓とみるか他の性格の遺構と理解するかについては、決定的な証拠がない。伝閔哀王陵出土「元和十年」銘骨蔵器も王陵の墳丘背面に造られており、新羅では前代の王陵などの封土や近接した場所に造墓する事例が存在するようである。『三国遺事』によると、新羅には「死胎の児」を裕福な人の墓に埋めると後孫が絶えないとする習俗⁵⁹があったとみられることから、単純に墓や祭祀遺構と性格を比定することは困難である⁶⁰。これらの例を王京内の火葬墓と認めても、居住地と墓地とが分かれていることは評価でき、基本的に王京内での埋葬例はなく、王京周辺に造墓されたものと判断される⁶¹。

次に、王京周辺の火葬墓について検討する（第3図）。

王京東南の朝陽洞遺跡や南の南山周辺で、唐三彩や緑釉陶器・青磁を骨蔵器とするA1型火葬墓が分布する。朝陽洞遺跡の唐三彩鍔は、石櫃に入った状態で発見され、蓋として銅製皿を被せていた⁶²。唐三彩鍔は、文様・器形・釉調のほぼ同様のものが中国河南省黄冶窯

から出土しており⁶³、黄冶窯産とみて間違いない。朝陽洞遺跡の火葬墓の被葬者を元聖王とする説⁶⁴や、聖徳王とする説もあるとのことであるが⁶⁵、鍔は通常蓋をもつ器種であるのに対し、朝陽洞遺跡では銅製皿を転用して用いており、セットが不揃いな点からは、王陵と評価するには躊躇する。しかし、舶来の唐三彩を入手し得た被葬者の高い社会的地位を考えることは可能であろう。南山出土の緑釉陶器や拝里三陵付近火葬墓の青磁壺も同様に被葬者の高い経済力と社会的地位を示唆する。

A1型は専用容器や特殊な埋納施設を構築する点、王京周辺にのみ分布する点で他の類型とは異なる特徴を持つ。また、周辺の石室墳とは分布が重複せず、単独で立地する点から、ある程度の墓域を確保していたと推測できる。唐三彩や緑釉陶器を保有することから、被葬者は社会的上位層であると想定でき、特に僧侶も含めた新羅の特権階層（具体的には王京の六部人など）が推測される。

その一方で、王京西方の西岳山、松花山麓一帯や北方の隍城洞・東川洞地区ではA2・B1・B2型火葬墓が群集して分布している。これらは、統一新羅期の石室墳と分布が重複する⁶⁶。その状況が、明らかな例として、東国大学校慶州キャンパス内の錫杖洞古墳群が挙げられる（第13・14図）。錫杖洞古墳群は、石室墳の時期が明確ではなく、併存関係は正式報告を待って検討する必要があるが、土葬墓と火葬墓が同一墓域内に葬られている点は評価できる。墓構造をみると、学生会館敷地出土火葬墓（A2型：転用外容器+陶質土器壺+青磁椀転用蓋）～61号墓（B1型：印花文土器壺）～その他（B1・B2型：木櫃・転用容器）と多様なあり方がみられるが、A1型はなく、群集して立地する点からも、先述の朝陽洞遺跡や南山周辺の事例とは異なる。

石室墳が9世紀代まで存続する新羅では、王京周辺の大多数の石室墳の中に火葬墓が混在していることが予測される。これが一般的な墓制のあり方と考えられ、伝統的な墓地を統一新羅期に入っても継続的に使用し、その中に新式の火葬墓が加わったものと評価できる。

新羅王京周辺における現在の資料の状況では、王京東南方と南山周辺の火葬墓が、墓構造と立地からみて、石室墳と重複する王京西方と北方よりも優越すると思われ、王京を取り巻く葬地間に格差⁶⁷が存在するようである。新羅の王陵の分布をみると、王陵比定が完全ではない点に注意を要するが、6世紀以降の王陵は武列王陵が王城西の西岳山裾に造られるほかは、8世紀前半代までは王京東側の慶州-蔚山街道および吐含山麓に位置する点が特徴である⁶⁸。李根直は、王京の東に王陵が造営される理由として、吐含山が新羅五岳の東岳として崇拝を集めていることから、仏国土を意味する仏国寺や石仏寺の創建などと同様の脈絡で理解する⁶⁹。筆者はこれに加え、蔚山街道が唐・日本から王京へ入る際の主要経路にあたることから⁷⁰、王陵が四天王寺・望徳寺などの寺院と共に、外交使節に対する視覚的

効果を狙って配置・造営された可能性が高く、新羅の王陵・葬地が、王京内外の都市計画と一体で配置されたものとする。

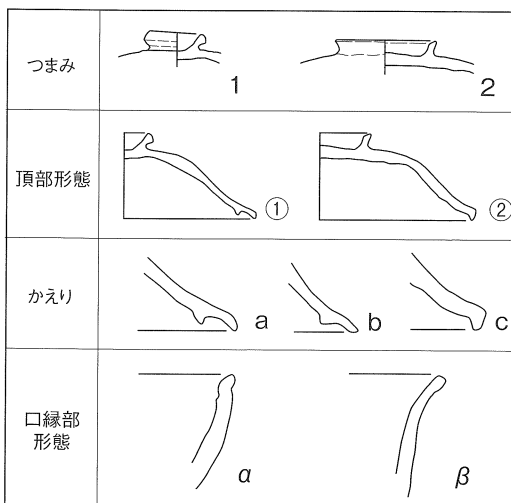
火葬墓の分布はA1型が東と南に偏っており、出土位置が把握可能な事例としては、南山周辺の検出例が多いことから、王陵よりひとつランクが下がる位置づけとして王京南方の葬地が設定されていた可能性がある。しかし、南山は新羅人にとって仏教聖地でもあり、多くの石仏・石塔などが分布していることから、南山への信仰が影響を与えた可能性も考慮する必要がある。そして、さらに下位の葬地として、王京の西・北方の伝統的な石室墳の墓域と重複する葬地が位置付けられていた可能性が高いと推測される。

この王陵・葬地の分布状況は、都城の北に皇帝陵・天皇陵を配し、東～東南および西を重視して葬地を配置した長安城や平城京、都城の南に天皇陵を配し東西に葬地を配した藤原京⁷¹とは異なる様相であり、新羅王京と王陵・葬地の空間構成は、新羅独自の理念により配置されていたものと推測される。

(3) 新羅の地方の火葬墓

王京以外の諸地域にA1型はなく、B2型の墓構造が圧倒的多数である点が注目される。これは、亀田修一が指摘する王京以外における規制の存在⁷²も考慮する必要がある。しかし、前述の通り、王京周辺にも錫杖洞遺跡や松花山遺跡など、A2型やB1・B2型が分布しており、単純に王京-地方で墓構造が排他的な関係にあることを示すのではない。むしろ王京周辺のみ分布するA1型と、王京周辺・地方で一般的にみられるA2・B1・B2型とが重層しており、王京周辺のA1型の存在が特徴的といえる。

新羅の地方における火葬墓のあり方として、公州艇止山遺跡と扶余周辺の火葬墓について検討する。



第4図 艇止山遺跡出土有蓋椀の属性分類

①公州艇止山遺跡の火葬墓について

公州艇止山遺跡は錦江の南岸にあたり、百濟熊津期の大壁建物や王族の殯儀礼に関わると推定される遺構が検出されたことで著名な遺跡である。報告書では19基が統一新羅期の火葬墓として報告されており、14基の出土位置が明らかになっている⁷³ (第18図)。艇止山遺跡の火葬墓群については、洪潛植により既に詳細な分析がおこなわれているが⁷⁴、ここでは艇止山遺跡の火葬墓群の形成過程を復元し、墓域の変遷と

いう視点から分析を試みる⁷⁵。なお、遺構に伴わない遺物の中にも統一新羅期の遺物が多数あり、実際の火葬墓の数はさらに増えると考えられるが、報告された図面をもとに分析を進める。

艇止山遺跡の火葬墓では、有蓋椀を骨蔵器とするものが主体であり、蓋のかえりの有無とつまみ・頂部の形態、文様が時期差を表しているようである。そこで、有蓋椀の属性分類をおこなう（第4図）。まず蓋をみると、つまみには小形のもの（1）と、輪状つまみ（2）とがある。また、頂部形態には丸みをもつもの（①）と頂部が平坦な形態（②）がある。かえりには、しっかりとしたかえりを貼り付けるもの（a）と、小さなかえりや痕跡的な段をもつもの（b）、かえりが無く端部を折り曲げるもの（c）に分かれる。蓋の各属性は第2表-1のような相関を示すことから、 $a \times ① \times 1$ をI類、 $b \times ② \times 1$ をII類、 $c \times ② \times 2$ をIII類とする。

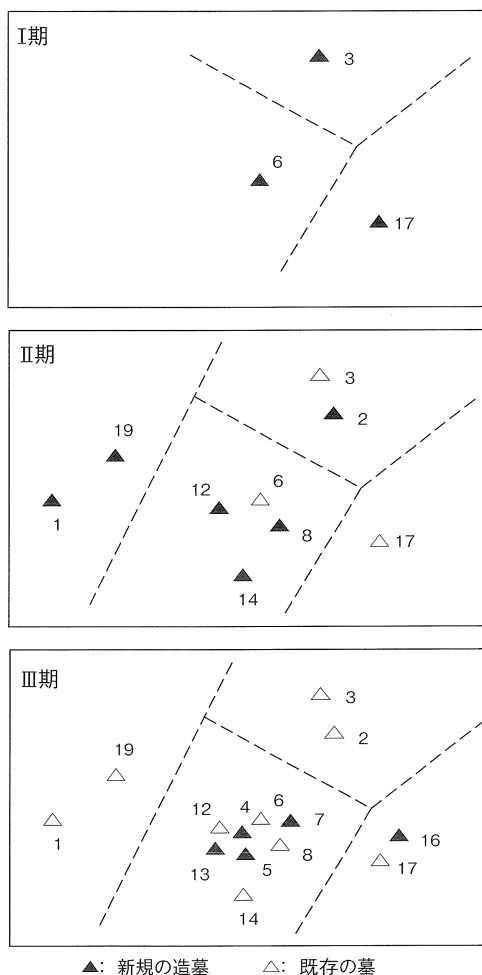
次に、椀には無高台の椀Aと高台をつける椀Bがあり、椀Bには、口縁部がやや内湾気味のもの（a）と、外反するもの（b）がある。椀Aにはほぼ直線的に立ち上がり外面に沈線を施すものと、口縁端部を外反させるものがある。

以上の椀形態と、先の蓋の分類と組み合わせると、第2表-2のようなになる。これは蓋と椀の型式変化の方向性が相関することを示し、既存の研究成果をふまえると、I → II → IIIの型式変化が想定できる。また、文様を見ると、縦長連続文（二重円

第2表 艇止山遺跡出土有蓋椀の属性相関表

1. 蓋の属性相関		かえり×頂部形態		
		a×①	b×②	c×②
つまみ	1	3・6・17	2・8・12・14・19	
	2		4・5・7・10・11・13・17・18	
2. 蓋と椀の属性相関		蓋		
		I	II	III
椀B	α	6・17	8・14	
	β			4・7・10
椀A	外反		12・19	
	直線	3(盒)		13

数字は火葬墓の遺構番号を示す



第5図 艇止山遺跡遺構変遷模式図

文・馬蹄形文)・多弁花文のA手法による施文(3・17号)や列点文のA手法による施文(6・14・13・17号)から、列点文のC手法の施文(7号)、波線文の施文(4号)へと漸移的に変化しており、器形変化の方向性と矛盾しない。

以上の検討により、I～III類を時期差と考え、遺構変遷をみる。

まず、3・6・17号墓が最も古く(I期)、次に1・2・8・12・14・19号墓(II期)、そして4・5・7・10・11・13・15・18号墓が造られる(III期)。

第5図をみると、当初3・6・17号墓が大きな墓域を確保し、II期に1・19号墓はある程度の墓域をもって造墓し、2号墓は3号墓の前面に、6号墓周辺では8・12・14・号墓を群集して造墓する様相が見て取れる。III期にはさらに6号墓周辺に群集して造墓することがわかる。

これは、I期の段階で墓域が既に決定されており、II・III期の火葬墓が前代に造られた墓との関係性を反映し、当初の墓域に規制されて造墓が決定されていたものと解釈できる。6号墓周辺では、造墓契機となる6号墓の前面で累代的に造墓を繰り返していることから、新たに造墓や葬送行為をおこなう過程で、葬儀参加者らは常に6号墓や前代の被葬者=祖先の記憶を思い起こし、自らの帰属意識が強調される効果があったと解釈できる。3号墓・17号墓周辺でもII・III期の造墓が見られるが、密集度は低く、継続的な墓地利用ではない。これらは、艇止山遺跡火葬墓群の被葬者が、それぞれ等質の関係ではなく、複数グループが現実の集団間関係・社会的位置を反映して造墓をおこなっていたことが想定される。

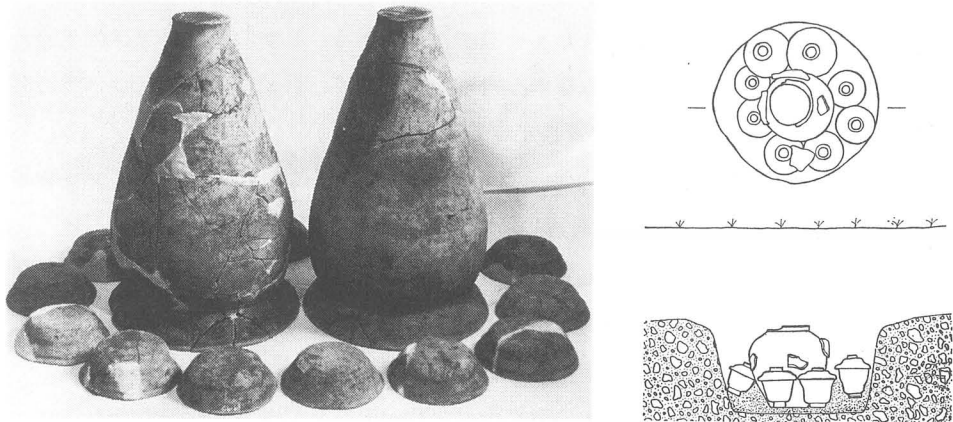
被葬者の性格を示唆する遺物の出土などが無く、被葬者の性格は不明だが、九州五小京⁷⁶の一つである熊川州の州城との関連から、王京の情報や仏教思想を介して火葬の知識を得ることのできた被葬者集団と推測する⁷⁷。

また、艇止山遺跡では骨蔵器の器種に壺が少なく、大部分が容量の小さな椀を骨蔵器とする点は重要である。これは、王京周辺のA1型や他地域の大型壺類を骨蔵器とする火葬墓と異なり、骨蔵器を選択する時点で火葬骨すべてを埋納する意図は無かったものと考えることができ、拾骨の意識自体が変容していたと解釈できる。地方における火葬墓造営における受容の様態を示すと考える。

②扶余周辺の統一新羅期火葬墓(第19図)

扶余中井里唐山遺跡の火葬墓は、単盃・二重盃・心壺多盃式⁷⁸とされたように、多様な埋納方法が存在するが、これは統一新羅期の地方における火葬墓の様相として再評価する必要がある。

新羅の火葬墓では、王京周辺・地方も含めて伴出遺物が少ない点の特徴といえる。その中で、扶余周辺の火葬墓は陶質土器有蓋椀を伴う事例が多い点、埋納方法のバリエーシヨ



第6図 川崎市宮前区有馬 2466 火葬墓の推定出土状況（左）と扶余中井里唐山2号墓（右）

ンが豊かな点を地域性として評価できる。中井里唐山1号墓の埋納方法（二重盥式）の類例は現在のところみられないが、中井里唐山2号墓の埋納方法（心壺多盥式）の類例は、慶州東川洞火葬墓の高杯複数埋納と慶州花谷里火葬墓の土製十二支像の埋納例が関連する可能性がある。ただし、東川洞火葬墓は火葬墓であるかが不明な点と、時期が大きく異なる点、花谷里火葬墓の十二支像に対して中井里唐山2号墓では碗が8個体と内容が異なる点に問題が残る。中井里唐山遺跡でみられるような多様な埋納方法が王京や他地域で見られるか否かは今後の資料の蓄積を見なければならぬが、地方における火葬習俗の変容を示す可能性が高い。

なお、壺の周囲に小型の土器を圍繞する例として、日本の神奈川県川崎市宮前区有馬 2466火葬墓例（9世紀前半）がある（第6図）。これは倒置した土師器長胴甕の周囲を伏せた土師器杯19点が圍繞していたとされ、既に中井里唐山遺跡例との類似が認識されていたが⁷⁹、中井里唐山遺跡例を統一新羅期の火葬墓とみることで、新羅の地方と、日本の関東地域との関係を考えることが可能になると考える。『続日本紀』では、7世紀後半～8世紀後半にかけて、関東地域に新羅人・百濟人・高麗人を投化・帰化させた記事が多くみられる⁸⁰。川崎市宮前区は旧武蔵国橘樹郡にあたり、渡来人の移配記事には出てこないが、同様の事情を示す可能性がある。関東に移配された渡来人の中に僧尼も含まれることから、宮前区有馬2466火葬墓例においても、扶余中井里唐山遺跡と同様の火葬習俗や葬送儀礼が伝えられたことを反映する可能性がある。

韓半島と日本との間には様々なレベルでの交渉が想定できるが⁸¹、これは支配者層とは異なるレベルで、地域性を表す要素が伝播した可能性を示す事例といえる。

3. 小 結

以上の分析をまとめる。百濟の火葬墓については資料上の問題があることを指摘した。

この点を踏まえた上で、百済の火葬墓は、有蓋短頸壺と有蓋盒と骨蔵器の器種が少なく共通している点、羅城内に火葬墓が存在する点の特徴である。しかし、百済では従来考えられてきたよりも、火葬は盛行していなかった可能性が高く、百済の火葬墓についての評価は今後の資料の蓄積を見ながら、再評価する必要がある。

新羅の火葬墓は、墓構造をみると、王京周辺のA1型の特殊な墓構造の存在が特徴であり、A2・B1・B2型は王京と地方で共通し、地方ではB2型が圧倒的多数である。

王京周辺の分布では、基本的に王京内の居住地と墓地とは分けられており、王京外に墓地が設けられていた可能性が高い。また、王京と王陵・墓地の位置関係と、墓地間の格差などについては、日本・中国とは異なる新羅独自の理念を反映する可能性がある。

王京周辺では大多数の石室墳の中に少数の火葬墓が混在しており、伝統的な墓地が統一新羅期でも継続的に使用され、その中に火葬墓が新たに加わったものと考えられる。

地方では公州艇止山遺跡の墓地分析から、複数グループによる累代的な墓地の利用と、集団意識の再生産がおこなわれていたことを指摘した。また、地方では王京周辺の火葬墓とは拾骨の意識や埋納方法が変容し、地域性が表れていた可能性を指摘した。

V. 考 察 - 日本古代火葬墓の系譜 -

1. 日本の古代火葬墓について

本節では、韓半島との比較のために、日本の古代火葬墓の概略と、墓構造の諸特徴について述べる⁸²。

日本の古代火葬墓の性格として、黒崎直は、古代墳墓の変遷を整理する中で、土葬・火葬の転換期が、天皇喪葬の画期と連動することを見出し、8世紀代の火葬について、天皇喪葬を範として、貴族・官人層がそれに従ったものとの理解を示した⁸³。この枠組みが現在でも支持されており、小林義孝は、持統天皇の火葬採用と元明天皇の遺詔にみられる薄葬の内容から、伝統的な遺体観・靈魂観からの脱却や律令制に基づく官僚機構の円滑な運営を目指す支配者層の火葬の導入における意図を評価し⁸⁴、森本徹も墓制の管理機能を想定し、火葬への転換に支配者層の政治的意図を重視する⁸⁵。

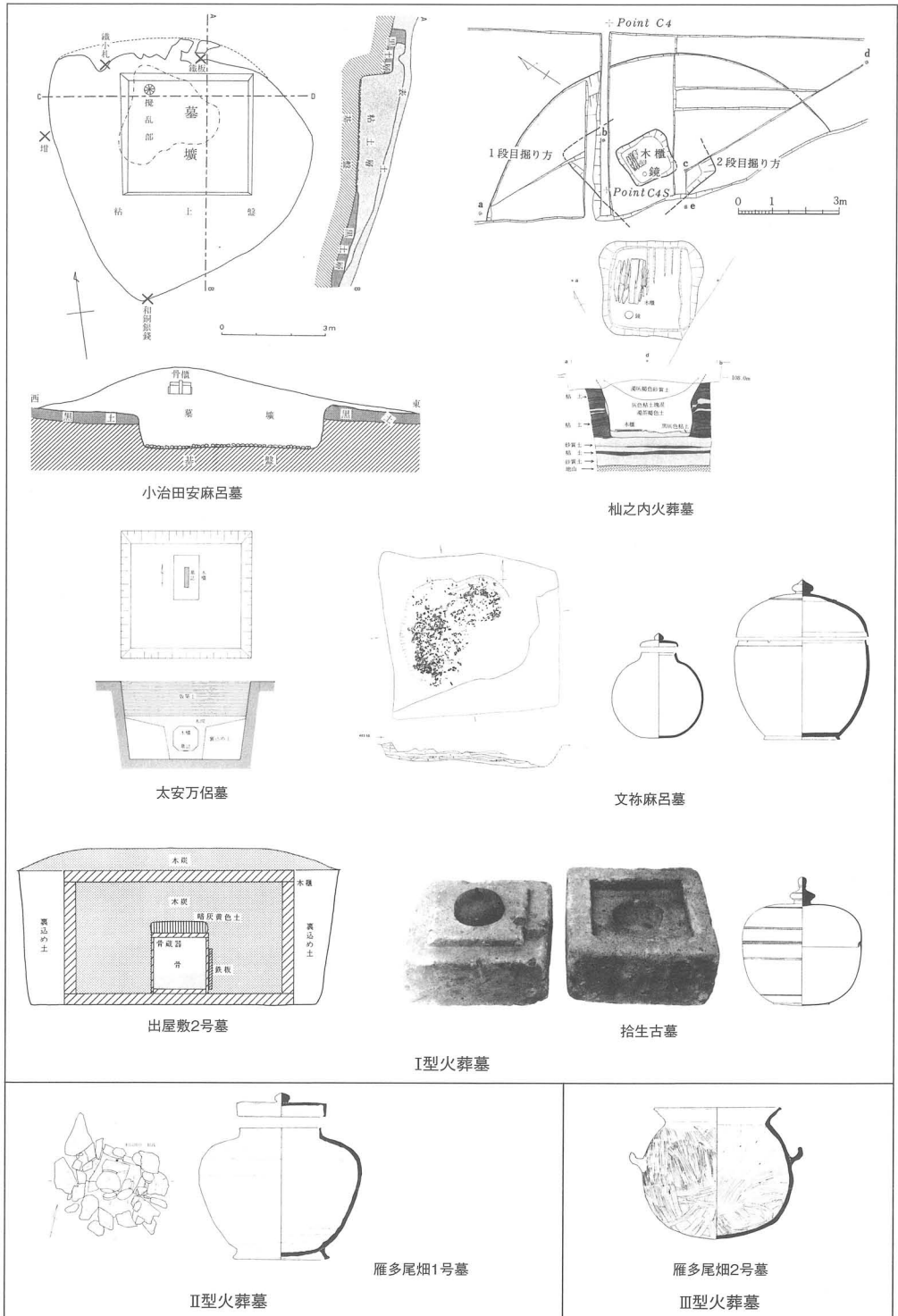
さて、筆者は、日本古代の火葬墓は墓構造から以下のように大きく3つの類型に分類できると考えている（第7図）。

I型：木槨・粘土槨・木炭槨・石櫃×専用容器（金属製・ガラス製容器、木櫃）

II型：小石室の構築と須恵器大甕・土師器甕の被覆、素掘土坑×短頸壺（壺A）

III型：素掘土坑×転用容器（煮炊具・貯蔵具・供膳具類）

このうちI型は専用の骨蔵器を木槨・粘土槨・木炭槨などの特別に構築した槨施設に納める点の特徴であり、大和盆地周辺に分布が集中し、前代の墳墓と重複しない単独的な



第7図 日本の古代火葬墓の3類型

第3表 被葬者と墓構造から見た階層性

被葬者・遺構名	官位				在地 氏族	骨蔵器				埋納施設				立地		時期	
	皇族 以上	三位 以上	五位 以上	六位 以下		僧侶	金銅製	木櫃	壺A	土師 甕	粘土柳 木柳	木炭柳	石櫃	土器 被覆	石組		素掘 土坑
石川朝臣年足	●						●				●						天平宝字6(762)
文忌寸柝麻呂		●				●				●						●	慶雲4(707)
威名真人大村		●				●							●			●	慶雲4(707)
太朝臣安万侶		●					●									●	養老7(723)
小治田朝臣安麻呂		●					●									●	神龜6(729)
美努連岡萬		●					●									●	天平2(730)
紀吉継		●					●									●	延暦3(784)
宇治宿禰				○		?							●				慶雲2(705)
伊福吉部臣徳足比売				○		●							●		●		和銅3(710)
山代忌寸真作				●									●		●		戊辰(728)
高屋連牧人				●											●		宝龜7(776)
下道朝臣國勝國依母					●	●							●		●		和銅元(708)
僧道葉					●			●					●		●		和銅7(714)
僧行基					●	●							●		●		天平21(749)
雁多尾畑1号墓			○	○				●						●		●	平城Ⅱ
三ツ塚20号墓			○	○										●		●	平城Ⅲ・Ⅳ
三ツ塚22号墓			○	○										●		●	平城Ⅲ
三ツ塚15A号墓			○	○										●	●	●	平城Ⅲ・Ⅳ
三ツ塚34号墓			○	○										●		●	平城Ⅱ
雁多尾畑2号墓			○	○										●		●	平城Ⅱ
雁多尾畑3号墓			○	○										●		●	平城Ⅱ
雁多尾畑4号墓			○	○					●					●		●	平城Ⅱ

どから、都城周辺の特殊な墓構造をもつ火葬墓と評価できる。このⅠ型は、墓誌出土墓や被葬者層の推定可能な火葬墓との検討の結果、五位以上の官位と高い相関がみられる（第3表）。そして、これは律令の「喪葬令」にみられる、官人を対象に官位に応じて葬具や葬送夫の支給をおこなう「公葬制」を意図した規定⁸⁶と関連する可能性が高いと考えられる。また、Ⅱ・Ⅲ型火葬墓は都城周辺の他、全国に広く分布しており、骨蔵器や埋納施設・祭祀行為などの地域差が大きいことが特徴である。

以上から、Ⅰ型とⅡ・Ⅲ型は被葬者の階層差を反映し、特にⅠ型については五位以上の上・中級官人層の墓であり、「喪葬令」と関連して都城周辺に造墓されたものと考えられる。本稿ではこのⅠ型火葬墓を支配者層の火葬墓と捉え、このⅠ型火葬墓の系譜関係について、検討を進める。

2. 日本古代火葬墓の系譜をめぐって

以下では、研究史でみた日本古代火葬墓の系譜に関する諸説について検討する。

(1) 百済説の検討

まず、百済と日本の火葬墓との系譜関係について検討する。筆者は百済と日本の火葬墓との関係は薄いと考えている。

本稿の分析で、百済では火葬があまり盛行していないと指摘したが、さらに、百済と日本の火葬墓との造営年代には時期差が存在する。百済の火葬墓は泗泚期（538～660年）の造営であり、日本の火葬は道昭の火葬（700年）が始まりとされ、考古学的にも7世紀に遡る事例はわずかで、8～9世紀を中心に盛行することが追認されている。なお、北山峰生が最近、7世紀代の火葬墓の存在を積極的に評価する見解を提起したが⁸⁷、まだ確実である

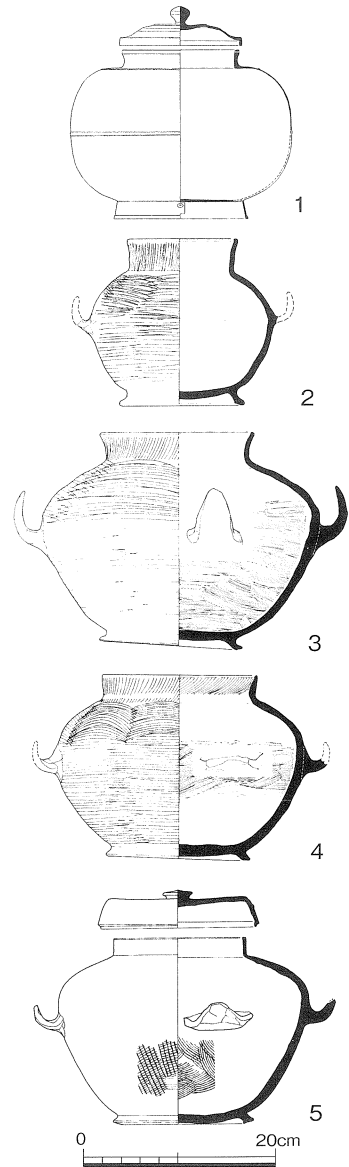
とは言い難い。たとえそれらの遺構を火葬墓として認めたと上でも、北山が出現期の火葬墓とした墓は、全て木製骨蔵器である点が注意され、百濟火葬墓の有蓋短頸壺や有蓋盒を骨蔵器とする特徴とは異なる。

また、従来、百濟と日本の火葬墓の系譜関係を認める根拠とされてきた、有蓋短頸壺と日本の短頸壺（壺A）との関係についても検討の余地がある。

日本の壺Aの祖型に関して、藤沢一夫は「百濟の扶余都城時代の遺例に近似し、その源流を察知せしめるものがある」⁸⁸とし、山本孝文も百濟の有蓋短頸壺と日本の壺Aとの関係を考える⁸⁹。一方、壺Aの蓋に残る沈線などから金属製品を模倣したものと考えた小田富士雄⁹⁰や、銀・銅の鑄造品にそのモデルを求める矢部良明⁹¹らのように金属器に壺Aの祖型を求める説もある。

これは、壺Aの型式分類をふまえ、最古型式と百濟有蓋短頸壺や金属製容器との形態比較により解決する必要がある。壺Aの分類・編年に関しては、藤森栄一以来、胴部最大幅の位置の下降が時間的変遷の指標となり⁹²、黒崎直による胴高指数をもちいた編年⁹³が提示されている。これらは、主に須恵器の壺Aを対象とするものであるが、ここでは土師器壺Aを素材として、壺Aの祖型について考えてみたい。

土師器壺Aは、当該期の土器の特徴である土師器・須恵器の互換性⁹⁴をもつ器種の一つであり、須恵器壺Aと同形態である。全国的に出土する須恵器壺Aに比べ、都城や寺院・火葬墓などからの出土が中心で、出土例が少なく、従来あまり注目されていない。しかし、7世紀代の中核地域である飛鳥・藤原地域では、飛鳥Ⅳ・Ⅴ（7世紀後半～8世紀初頭）の遺構から出土する須恵器壺Aは少数であり、土師器壺Aの出土量の方が多く、奈良時代の平城宮・京において須恵器壺Aが主流となることから、土師器壺Aと須恵器壺Aの間には出現時期に差があることが推測される。



第8図 壺Aの変遷

- 1: 法隆寺香水壺
- 2: 藤原宮第72次調査 SE8061 (飛鳥Ⅳ)
- 3: 石神遺跡 S K 518 (飛鳥Ⅳ～Ⅴ)
- 4: 藤原京右京十条一坊西北坪 井戸 (飛鳥Ⅴ)
- 5: 僧道葉墓須恵器骨蔵器 (714年)

この飛鳥・藤原地域出土の土師器壺Aは、口縁部が長いものからやや短いものへ、牛角状の長い把手から、三角形に近い把手を貼り付けるものへと変化する（第8図の2→3→4）。第8図4は、和銅3年（714）の墓誌を伴出した奈良県僧道葉墓の須恵器壺A（第8図5）とほぼ同形態であり、奈良時代以降主流となる須恵器壺Aにつながるものと考えられる。

土師器壺Aの形態的特徴は、胴部最大幅が体部上～中位にあり、口縁端部上面が平坦でやや肥厚する点と、外方へ踏ん張った高台を貼り付ける点である。さらに口縁部と体部外面全面に暗文ミガキを施す点も特徴であり、これは当該期の他の土師器供膳具にみられるように金属器の光沢を表現したものと考えられる⁹⁵。これらの土師器壺Aの諸特徴は、百済の有蓋短頸壺よりも、金属製の壺を模倣して製作された可能性が高いと考えられる。モデルとなった金属製壺については、類例が少ないものの、奈良県法隆寺宝物鍍銅製香水壺⁹⁶（第8図1、7世紀末～8世紀前半）が最も近い形態といえ、時期を前後する奈良県法輪寺塔金銅製舍利容器⁹⁷（7世紀後半）、奈良県東大寺金堂鎮壇具銀製鍍金狩獵文小壺⁹⁸（752年）などと同様の容器と推測される。

須恵器壺Aでも、土師器壺Aと同様の形態的特徴の他、蓋に宝珠形つまみがつく例や、沈線やヘラミガキを施す例が存在することから、やはり金属製の壺を模倣して製作したものと考えることができる。

飛鳥・藤原地域以外で7世紀後半を遡る壺Aがあるか否か、金属製の壺には無い把手をつけることの意味、土師器壺Aと須恵器壺Aの関係など、さらに詳細な検討が必要であるが、現時点では日本の壺Aは、金属製の壺（特に仏器として使用）を模倣して製作された器種と考える⁹⁹。

以上から、百済と日本の火葬墓との関係は、百済における火葬の状況に加え、従来説の根拠となっていた短頸壺の形態的類似に関しても直接的な系譜関係を持つとは評価できず、百済の火葬墓が日本の火葬墓の源流となった可能性は薄いと考える。

(2) 新羅説の検討

本稿で分析した新羅と日本の火葬墓は、骨蔵器の形態や埋納施設に直接的な系譜関係は認めがたい。それは、日本の金属製・ガラス製容器を骨蔵器とし、粘土槨・木炭槨を構築する点と、新羅の印花文で装飾した専用骨蔵器や連結把手付壺というように、それぞれ独自の骨蔵器・埋納施設を持つ点から、骨蔵器の器種選択と埋納施設の構築において、日本と新羅の火葬墓の間に、直接的な関係は薄いと考えられるためである¹⁰⁰。

しかし、両者の火葬墓には共通点がある。それは、都城・王京周辺に分布する特殊な墓構造（I型・A1型）の存在である。

この専用容器を使用し専用の外容器や埋納施設に納めるI型・A1型の墓構造は、入れ子

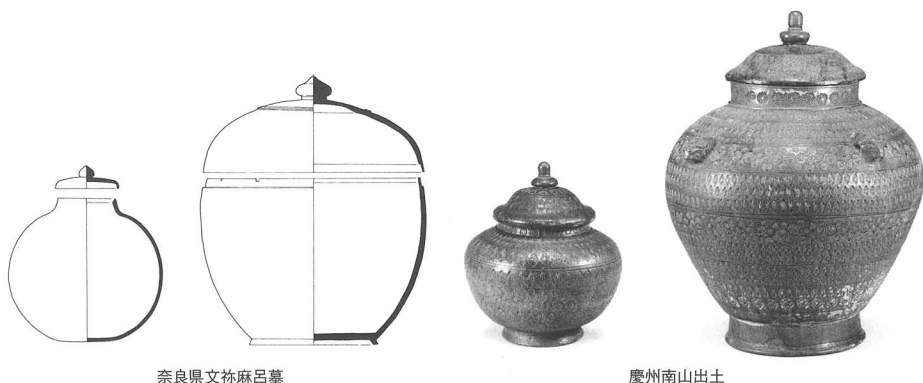
構造をとる点が共通する（第9図）。こうした火葬墓にみられる入れ子構造は、既に指摘されているように¹⁰¹、舍利容器を模倣したものと考えられる。

東アジアの舍利容器には、入れ子構造をとる荘嚴形式が広がっている。これは『大涅槃経』などに見える、釈迦の葬儀に際し遺体を金棺・銀棺・銅棺・鉄棺という四重の棺に安置した故事にちなむとされ¹⁰²、日韓の仏舎利容器にもみられる形式である¹⁰³。日本と新羅のI型・A1型に共通してみられる入れ子構造は、この舍利荘嚴形式を火葬墓に採用した結果と考えられる。このとき、日本ではガラス製容器や金属製容器など、より忠実に舍利容器に近づけようとしているのに対し、新羅では入れ子構造と盒形態という構造的側面を採用し、印花文土器や連結把手付壺などの専用容器を創出している点に両国の受容の相違がみられる¹⁰⁴。

そして、特殊な墓構造をもつ墓を都城・王京周辺につくる点は、律令制とくに「喪葬令」との関係が想起できる。

日本では、都城の成立と葬地の設置が不可分の関係にあると考えられ、墳墓の分布や墓構造の面からみても、都城周辺の葬地への埋葬がおこなわれていた可能性が高い¹⁰⁵。新羅の律令制度は、武列王が654年に唐律令を継受して律令を施行しており、その中に喪葬令規定も存在していたとされる¹⁰⁶。新羅の喪葬令における、皇都条などの条文の詳細については不明な点が多いが、武烈王以降の王陵の配置状況からみて王京と陵域が分けられていることや、本稿で分析したように基本的に王京外に葬地が分布する点に注目したい。これらはおそらく皇都条のような京内の埋葬規制が存在し、葬地を京外へ設けたことを反映すると考えられる。

以上から、日本・新羅の火葬墓間に直接的な系譜関係は認められないが、両者の墓構造の共通点からは、「仏教思想（特に仏舎利信仰）」と「律令制度」という共通する背景の存在が考えられる。



奈良県文祢麻呂墓

慶州南山出土

第9図 骨蔵器の入れ子構造

日本と新羅では、非常に近い時期に支配者層が火葬を受容する。新羅における火葬の初現記事は慈蔵の火葬であるが、文武王が681年に「西国の式」によって火葬することを遺詔¹⁰⁷しており、中国の影響で火葬を採用したことが分かる。一方、日本では700年の道昭火葬記事を初現とし、持統天皇をはじめ天皇や貴族の火葬がおこなわれている。当時、日本は663年の白村江の敗戦以降、遣唐使を中断した一方で新羅との頻繁な交渉をおこなった時期であり、政治・法律への影響や、新羅系の考古資料の存在など両者の交流はかなり密接であった¹⁰⁸。このような時代背景をふまえ、網干善教は火葬の受容に関して、新羅仏教や文武王の火葬の情報など、新羅の火葬からの影響を強く主張する¹⁰⁹。

しかし、筆者は先に見た墓構造の差異に加え、天皇が火葬を採用する経緯に注目し、日本の火葬の導入に関しては、新羅からの直接的な影響は低かったものとする。

文武王の火葬は天武10年（681）10月に新羅の使者により伝えられており、これをもって、日本の天皇の火葬への影響が考えられているが¹¹⁰、文武王の次の神文王（土葬）、孝昭王（土葬）の喪葬についても持統7年（693）2月、大宝3年（703）正月にそれぞれ新羅使が伝えている。これらの情報を知った上で、持統天皇（703）・文武天皇（707）らが火葬されている点からは、やはり、日本の支配者層が独自の判断で火葬を採用したと評価でき、この点に積極的な意味を見出したい¹¹¹。

新羅では、計8人の王が火葬で葬られているが、文武王を除くと、新羅王の火葬は、孝成王（742）、宣徳王（785）、元聖王（798）、眞聖王（897）、孝恭王（912）、神徳王（917）、景明王（924）と、8世紀中頃～末、9世紀末～10世紀前半にあたる。本稿で分析したように、新羅の火葬は一部6世紀に遡り、7世紀後半～9世紀前半を中心に盛行するが、それは王の喪葬の動向とは基本的に無関係とみられる。この点が、天皇喪葬を範として墓制の転換がみられる日本との差異といえる。

(3) 中国説の検討

前節までに、百済と日本の火葬墓は関係が薄いこと、日本・新羅の火葬墓には墓構造からみて仏教思想・律令制度という共通の背景が存在するが、直接的な系譜関係は無いと考えた。

筆者は日本における火葬の系譜は中国に求められると考えている。

中国では、管見の限り当該期の火葬墓の調査事例はなく、現状では考古学的な検討は困難である。ここでは、既存の研究成果を参考にして、火葬の導入における中国の影響について検討する。

まず、唐代において火葬は主流ではない。これは伝統的な儒教思想が根強く、死後も肉体を保存することを望み、遺体を焼失する火葬への抵抗が存在していたからであり、唐末宋初に入りようやく一般層にまで広がりが見られるという¹¹²。しかし、火葬が全くおこなわ

れていなかったわけではない。唐代の僧侶の一部に火葬の事例が知られている¹¹³。

中国の火葬と日本の火葬との関係では、玄奘の存在が注目される。玄奘は西域から新たな仏典を持ち帰り、漢訳をおこなうなど、唐代の仏教界の中で、画期的な業績を挙げた。この玄奘の元に師事したのが道昭である。道昭は玄奘から新訳經典・舍利を与えられ、日本に法相宗¹¹⁴を伝え、諸国を周遊し土木事業をおこなうなど、仏教界のみならず当時の社会に大きな影響を与えている。道昭の活動は、師玄奘の影響とともに、唐の最新の仏教思想の実践としての意味を持ち、それは支配者層にとっても大きな影響を与えたと考えられる¹¹⁵。『続日本紀』文武4年（700）三月己未条の薨伝では道昭の火葬を「天下の火葬此より始まれり」と記すが、この火葬記事は説話的要素が多く、道昭火葬の実行を疑問として正史の上で持統天皇の火葬を正当化するための記事とする見解もある¹¹⁶。また仏教公伝から火葬導入までの時間差をもとに、火葬導入における思想的な保守性を評価する考え¹¹⁷もある。しかし、筆者は道昭の火葬とそれに続く天皇の火葬には、日本の支配者層における最新の中国仏教界の動向に対する敏感な反応という側面を評価すべきと考える¹¹⁸。

火葬の導入された時期は、日本の律令国家の成立期にあたり、天武・持統朝に、藤原京の造営・律令の制定など様々な施策がおこなわれている。しかし、中国でも主流ではなく、新羅王の最新の喪葬状況も知りながら、あえて天皇・支配者層に火葬が採用された背景には、日本が唐や新羅の情報を集めた上で、支配者層が律令国家の理念にふさわしい葬法という位置づけで火葬を受容した可能性が考えられる¹¹⁹。

一方、新羅でも事情は日本と同様であったと考える。当該期は文武王が「西国の式」として、中国の火葬を受け入れたのをはじめとして、新羅から多くの僧が入唐し、最新の仏教思想を学んでいることや¹²⁰、韓半島の統一による中央集権体制の確立が図られ、文武王・神文王代には国家祭祀の再編成や集権政策の根本である骨品制の確立がみられる¹²¹ほか、王宮・王京の整備も進められている¹²²。このような状況下で、唐の先進文化の一つとして火葬が受容されたものとみられる。

ただし、日本と新羅では、火葬の受容様相に差異が見られる。森本徹は、火葬は単なる葬法のひとつとして、石室墳と併存して営まれた新羅と、古墳と火葬墓の時期が重ならず、火葬が新たな支配者層の墓制として採用された日本とでは、墓制に対する重みが異なっていたと指摘する¹²³。天皇・王の火葬採用や独自の骨蔵器・埋納施設の採用など、火葬は、墓制に対する重み付けのほか、両国支配者層の国家理念など複雑な脈絡を反映した中で受容されたものと推測される。

VI. まとめ

本稿では、日本の古代火葬墓の系譜を探ることを目的とし、韓半島における火葬墓につ

いて分析をおこなった。その結果、以下の点を明らかにした。

- ① 百済の火葬墓は資料上の問題があり、慎重な判断が必要だが、骨蔵器の器種が少ない点、羅域内に火葬墓が分布する点の特徴である。しかし、従来考えられてきたよりも百済では火葬が盛行していない点を指摘した。
- ② 新羅の火葬墓について墓構造の分類をおこない、王京周辺に特殊な墓構造が存在すること、王京と地方に共通する墓構造が存在し、これらは階層差を示す可能性があることを明らかにした。そして、地方では王京と異なる地域性が現れることを明らかにした。また、王京と王陵・葬地の位置関係と、葬地間の関係については、日本・中国とは異なる新羅独自の理念を反映する可能性があるとした。
- ③ 従来、日本の古代火葬墓の系譜について大きく3つの説があったが、韓半島の様相と比較した結果、中国（唐）に求められる可能性が高い。日本古代の火葬は、支配者層において、律令国家成立期に中国からの先進文化の一つとして律令制度・仏教とともに受容し、律令国家にふさわしい葬法という位置づけで採用されたものとする。
- ④ 火葬の採用とその受容過程における、日本独自の骨蔵器・埋納施設の創出は、支配者層の国家理念や、墓に対する重み付けの差異などが関わる可能性が考えられる。

本稿では、現在までに入手・実見できた資料をもとに検討をおこなったが、韓国では、発掘調査の進展により、今後さらに新たな事実が明らかになる可能性が高い。今後の資料の蓄積をふまえた上で再検討を期したい。

謝 辞 本稿を成すにあたり、国立慶州文化財研究所の車順喆先生には資料収集に多大なご尽力を賜った。また、東国大学校博物館の李東憲先生からは印花文土器の観察・変遷について丁寧なご指導を賜った。深く感謝いたします。

また、以下の諸氏・諸機関から資料調査の協力と助言を得た。記して感謝申し上げます。

権宅章 金洛中 金度憲 金成南 金姓旭 金有植 朴芝然 朴辰一 成享美 安敏子
安宝蓮 尹龍熙 李鎔賢 田庸昊 崔장미 朱鎮玉 韓成鎬 洪鎮根 青木敬 高田貫太
次山淳 林正憲 山田隆文 国立慶州文化財研究所 国立慶州博物館 国立扶余文化財研究所
国立扶余博物館 国立公州博物館 国立金海博物館 国立晋州博物館 東洋大学校
以上にかかわらず、多々残った誤り・欠点は全て筆者の責任に帰することを明記する。

なお、本稿の成果の一部は平成18～20年度科学研究費若手研究（B）「古代東アジアにおける火葬習俗の伝播に関する基礎的研究（課題番号18720222）」および平成21～22年度「古代東アジアにおける都城と葬送地に関する考古学的研究（課題番号21720296）」に拠っている。

註

- 1 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報第38冊、奈良国立文化財研究所、1980年。
- 2 小林義孝「丙の年の人の故に焼き失わず」『歴史民俗学』第12号、批評社、1998年。小林義孝「古代の火葬と火葬墓」『古墳から奈良時代墳墓へ』大阪府立近つ飛鳥博物館、2004年。森本徹「韓国における初期火葬墓の研究」『青丘学術論集』第13集 韓国文化研究振興財団、1998年。
- 3 小林義孝「古代墳墓研究の分析視角」『古代文化』第51巻第12号、古代学協会、1999年。
- 4 森 浩一「大阪府泉北郡陶器千塚」『日本考古学年報』9、日本考古学協会、1961年。
- 5 姜仁求（岡内三真訳）『百済古墳研究』（日本語版）、学生社、1984年（原著は『百済古墳研究』一志社、1977年）。
- 6 藤沢一夫「火葬墳墓の流布」『新版考古学講座』第6巻雄山閣出版、1979年。
- 7 小田富士雄「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」『古文化談叢』第16集、九州古文化研究会、1986年。
- 8 火葬骨を納める容器の名称について、研究者により骨蔵器・蔵骨器・骨壺など表現が異なる場合がある。本稿では、小田富士雄の指摘に従い「骨蔵器」の名称に統一する。小田富士雄「日韓火葬墓の出現」（前掲註7）。
- 9 山本孝文「百済火葬墓에 대한考察」『韓国考古学報』第50輯、韓国考古学会、2003年。
- 10 須恵器壺類の器種名は、奈良文化財研究所の分類を参考にした。奈良文化財研究所『平城宮発掘調査報告XVI』奈良文化財研究所学報第70冊、2004年。
- 11 本稿では、新羅の半島統一以降の時代を主に対象とするが、一部それよりも遡る時期も扱う。煩雑さを避けるため、「新羅」の語を使用し、必要に応じて「統一新羅」の語も用いることとする。
- 12 網干善教「日本上代の火葬に関する二、三の問題」『史泉』第53号、関西大学史学会、1979年。
- 13 金子裕之『木簡は語る』歴史発掘12、講談社、1996年。
- 14 森本六爾・高橋健白「墳墓」『考古学講座』第9号、國史講習會、雄山閣、1926年。（森本六爾『日本の古墳墓』木耳社、1987年所収）。
- 15 斎藤 忠「新羅火葬骨壺考」『考古学論叢』第2輯、考古学研究会、1936年。（『新羅文化論攷』吉川弘文館、1973年所収）。
- 16 藤沢一夫「火葬墳墓の流布」（前掲註6）。
- 17 小田富士雄「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」（前掲註7）。
- 18 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」（前掲註2）。
- 19 奥村茂輝「天武・持統朝における仏教受容の一様相」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅶ』帝塚山大学考古学研究所、2005年。
- 20 三名田隆信「わが国上世における火葬の風習について」『史泉』第5号、関西大学史学会、1957年。
- 21 斎藤 忠「扶余発見の壺の一型式」『考古学雑誌』第32巻第1号、日本考古学会、1942年（『新羅文化論攷』吉川弘文館、1973年所収）。
- 22 姜仁求『百済古墳研究』（前掲註5）。
- 23 山本孝文「百済火葬墓에 대한考察」（前掲註9）。
- 24 斎藤 忠「新羅火葬骨壺考」（前掲註15）。
- 25 鄭吉子「新羅蔵骨容器研究」『韓国考古学報』8、韓国考古学会、1980年。
- 26 宮川禎一「新羅連結把手付骨壺の変遷」『古文化談叢』第20集（中）、九州古文化研究会、1989年。

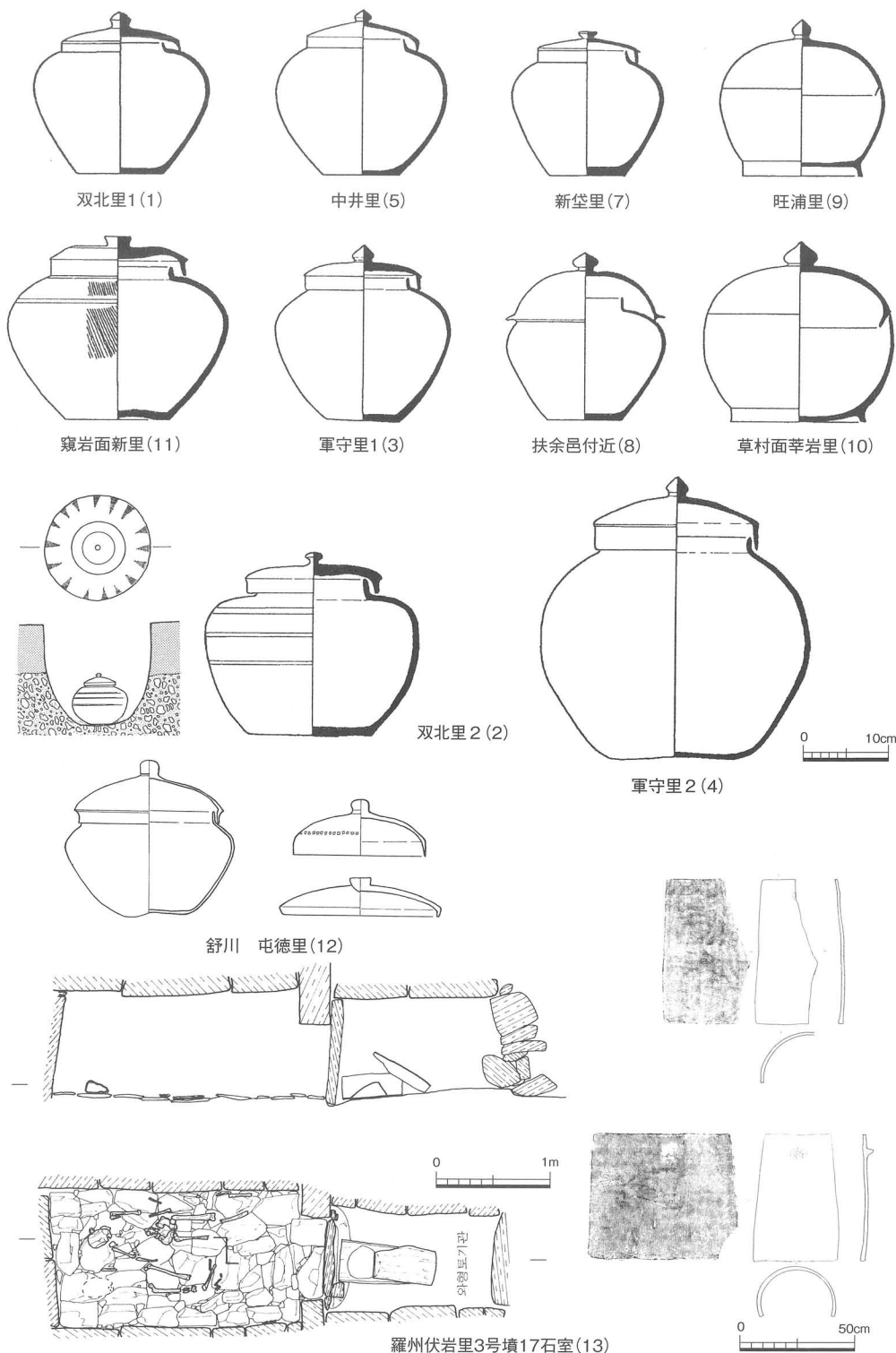
- 27 洪漕植「통일신라의 장·묘제」『통일신라시대고고학』韓國考古学会、2004年。
- 28 洪漕植「統一新羅土器의 上限과 下限－연구사 검토를 중심으로－」『嶺南考古学』34、嶺南考古学会、2004年。
- 29 洪漕植「통일신라 연결고리유개호의 발생과 전개」『韓國上古史學報』第50号、韓國上古史学会、2005年。
- 30 亀田修一「統一新羅の考古学と日本」『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館、2005年。
- 31 金鎬詳・金宰賢「新羅王京 所在 火葬墓의 構造와 出土人骨分析」『國邑에서 都城으로』新羅文化祭學術論文集第26輯、慶州市・新羅文化宣揚會・慶州文化院・東国大國史学科、2005年。
- 32 石秉哲「統一新羅 慶州地域 火葬墓 研究」慶州大学校大学院文学碩士學位論文、2006年。石秉哲「경주지역 新羅 火葬墓에 대하여」『新羅史學報』9、新羅史学会、2007年。
- 33 洪漕植「신라의 화장묘 수용과 전개」『韓國上古史學報』第58号、韓國上古史学会、2007年。
- 34 洪漕植「통일신라의 화장묘 造營層과 地方 拡散」『考古廣場』創刊号、釜山考古学研究会、2007年。
- 35 車順喆「통일신라시대의 화장과 불교와의 상호관건성에 대한 고찰」『文化財』41-1、国立文化財研究所、2008年。
- 36 洪漕植「통일신라의 화장묘 造營層과 地方 拡散」(前掲註34)。
- 37 小田富士雄「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」(前掲註7)。
- 38 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」(前掲註2)。
- 39 小林義孝「古代墳墓研究の分析視角」(前掲註3)。
- 40 亀田修一「統一新羅の考古学と日本」(前掲註30)。
- 41 金成泰「建物址 出土 地鎮・鎮壇具의 檢討」『嶺南文化財研究』第18輯、嶺南文化財研究院、2005年。崔恩娥「경주지역 건물지의 鎮壇具에 관한 고찰」『文物研究』第11号、(財)東アジア文物研究學術財団・(財)韓國文物研究院、2007年。
- 42 李東憲「印花文有蓋甕研究」釜山大学校大学院文学碩士學位論文、2008年。李東憲「印花文有蓋甕의 相對編年」『考古廣場』2、釜山考古学会、2008年。
- 43 姜仁求『百濟古墳研究』(前掲註5)。
- 44 山本孝文「百濟火葬墓에 대한考察」(前掲註9)。
- 45 斎藤 忠「扶余發見の壺の型式」(前掲註21)。斎藤忠「百濟の古墳・火葬墓に見られる貨錢副葬の風習」『東アジア葬・墓制の研究』第一書房、1987年。
- 46 小林義孝「火葬墓における錢貨」『出土錢貨』第2号、出土錢貨研究会、1994年。
- 47 森 郁夫「古代における地鎮・鎮壇具の埋納」『古代研究』18、元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室、1979年。水野正好「想蒼雜記」『奈良大学紀要』第13号、奈良大学、1984年。
- 48 ただし、小兒棺と考えられる合口甕棺墓は除く。奈良国立文化財研究所『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所學報第56冊、1997年。
- 49 和田 萃「東アジアの古代都城と葬地－喪葬令皇都条に関連して－」『古代国家の形成と展開』大阪歴史学会、1976年。金子裕之「平城京と葬地」『文化財學報』第3集、奈良大学文学部文化財学学科、1984年。
- 50 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」(前掲註2)、山本孝文「百濟火葬墓에 대한考察」(前掲註9)。
- 51 山本孝文「百濟火葬墓에 대한考察」(前掲註9)。
- 52 従来火葬墓と報告された資料に続く、最近の調査事例を尋ねたところ、扶余周辺では火葬墓はみつかっていないとのことである。今後にも発掘調査の進展による資料の蓄積を見守る必要がある。扶余

- 周辺の調査状況や百濟火葬墓の理解については、2009年2月の国立扶余文化財研究所での研究報告の際に、出席の諸先生方より口頭にて教示を得た。
- 53 洪漕植「통일신라의 장·묘제」(前掲註27)、および洪漕植「신라의 화장묘 수용과 전개」(前掲註33)。
- 54 王京の範囲については各説があり確定していないが、最近の発掘調査を踏まえた研究によると、当初の王京が数次にわたり拡張されているようである。王京の厳密な範囲については本稿の目的ではないが、山田隆文の復元に従い7世紀後半代の、月城を中心として南は南川北岸の段丘崖、西は靈廟寺東方の道路、東は狼山、北は北川付近までの範囲と捉えておく。黄仁鎬「新羅王京の変遷」『東アジアの古代文化』126号、大和書房、2005年。山田隆文「新羅金京の形成と変遷過程」『研究紀要』第14集、由良大和古代文化研究協会、2009年。ほか
- 55 文化財管理局『雁鴨池発掘調査報告書』1978年。
- 56 鄭吉子「新羅蔵骨容器研究」(前掲註25)、亀田修一「統一新羅の考古学と日本」(前掲註30)。
- 57 崔恩娥「경주시역 건물지의 鎮壇具에 관한 고찰」(前掲註41)。
- 58 鄭吉子「新羅蔵骨容器研究」(前掲註25)。
- 59 『三国遺事』卷第4 義解第5 圓光西學に「後有俗人兒胎死者。彼土諺云。當於有福人墓埋之。種胤不絶。乃私瘞於墳側」とある(金思燁『完訳 三国遺事』明石書店、1997年)。
- 60 石秉哲『統一新羅 慶州地域 火葬墓 研究』(前掲註32)。
- 61 新羅は三国時代から慶州盆地を中心地としており、その本拠地へ王京を造るという事情から、前代の墓を京内に取り込む形で王京が建設されている。日本では、藤原京建設において削平された四条古墳と、選択的に残された四条塚山古墳の例を律令期陵墓の創出と関連づける見解がある(今尾文昭「新益京の借陵守」『考古学に学ぶ-遺構と遺物-』同志社大学考古学シリーズⅦ、同刊行会、1999年。)が、新羅王京の建設にあたり、前代の墳墓がどのように位置付けられ、居住地との境界を持ち、管理されていたのかについても興味深い課題である。
- 62 三上次男「朝鮮半島出土の中国唐代陶磁とその史的意義」『朝鮮学報』第87輯 朝鮮学会、1978年。
- 63 奈良文化財研究所『鞏義黄冶唐三彩』奈良文化財研究所史料第61冊、2003年。奈良文化財研究所『黄冶唐三彩窯の考古新発見』奈良文化財研究所史料第73冊、2006年。
- 64 洪漕植「신라의 화장묘 수용과 전개」(前掲註33)。
- 65 小山富士夫「慶州出土の唐三彩鏡」『東洋陶磁』第1号、東洋陶磁学会、1974年。
- 66 慶州盆地における石室墳の分布については、東潮・田中俊明『韓国の古代遺跡 1 新羅編』中央公論社、1988年を参考にした。
- 67 金子裕之「平城京と葬地」(前掲註49)。なお、本稿では都城の成立にともなって都城周辺に設定されたと考えられる墓地のことを「葬地」と呼称する。
- 68 斎藤 忠「新羅王陵伝称名に関する考古学上の一考察」『考古学論叢』第14輯、考古学研究会、1939年(『新羅文化論叢』吉川弘文館1973年に所収)。斎藤忠「統一新羅の陵墓の考察」『朝鮮学報』第119・120号、1986年。李根直『新羅 王陵의 起源과 變遷』嶺南大学校大学院博士学位論文、2006年。
- 69 李根直『新羅 王陵의 起源과 變遷』(前掲註68)。
- 70 唐の侵入を防ぐ目的で建立された四天王寺が位置すること、日本の侵入に対して毛伐城を設置する(722年)など、新羅王京へ海から入る際のルートとして王京の東のルートが重視されていたことが分かる。山田隆文もこのルートの重要性を指摘し、新羅王京の南にのみ羅城が造られていた可能性を提起している。山田隆文「新羅金京の形成と変遷過程」(前掲註54)。

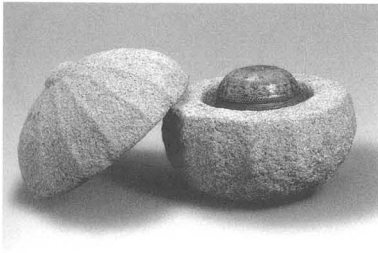
- 71 金子裕之「平城京と葬地」（前掲註49）、金子裕之「都城における山陵－藤原・平城京と喪葬制－」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会、2004年。
- 72 亀田修一「統一新羅の考古学と日本」（前掲註30）。
- 73 国立公州博物館『艇止山』1999年。
- 74 洪潛植「통일신라의 화장묘 造営層과 地方 拡散」（前掲註34）。
- 75 筆者は、日本の奈良県葛城市三ツ塚古墳群・古墓群を対象に同様の分析を試みた（小田裕樹「奈良県葛城市三ツ塚古墳群・古墓群の形成過程－古代氏族墓地の基礎的研究－」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室50周年記念論文集、同刊行会、2008年）。
- 76 朴泰祐「統一新羅時代の 地方都市에 対한 研究」『百濟研究』第18集 忠南大学校百濟研究所、1987年。山田隆文「新羅の九州五小京城郭の構造と実態について」『考古学論攷』第31冊、奈良県立橿原考古学研究所、2008年。
- 77 山本孝文も公山城など軍事・行政施設と関連する墓域と推定する。山本孝文「百濟滅亡에 対한 考古学的 接近」『百濟文化』32、公州大学校百濟文化研究所、2003年。
- 78 姜仁求『百濟古墳研究』（前掲註5）。
- 79 村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（上）－川崎市域における事例研究をふまえて－」『川崎市市民ミュージアム紀要』第2集、川崎市市民ミュージアム、1989年。村田文夫・増子章二「南武蔵における古代火葬骨蔵器の基礎的研究（下）－川崎市域における事例研究をふまえて－」『川崎市市民ミュージアム紀要』第3集、川崎市市民ミュージアム、1990年。
- 80 森 公章『古代日本の対外認識と通交』吉川弘文館、1998年。
- 81 亀田修一「統一新羅の考古学と日本」（前掲註30）。
- 82 日本の古代火葬墓の墓構造の分析については、別稿を用意している。
- 83 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」（前掲註1）。
- 84 小林義孝「丙の年の人の故に焼き失わず」、同「古代の火葬と火葬墓」（前掲註2）。
- 85 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」（前掲註2）、森本徹「日本における火葬墓の始まりをめぐって」『郵政考古紀要』第40号 郵政考古学会、2007年。
- 86 喪葬令の理解に関しては、稲田奈津子「日本古代喪葬儀礼の特質」『史学雑誌』第109編第9号、史学会、2000年。橋本義則「律令国家と喪葬－喪葬官司と喪葬氏族の行方－」『律令国家史論集』塙書房、2010年に拠る。
- 87 北山峰生「古代火葬墓の導入事情」『ヒストリア』第213号、大阪歴史学会、2009年。
- 88 藤沢一夫「土師器とその性格」『世界陶磁全集 1日本原始』小学館、1979年。
- 89 山本孝文「百濟火葬墓에 対한 考察」（前掲註9）。
- 90 小田富士雄「大分県の火葬墓」『白濁遺跡』佐伯市教育委員会、1958年。小田富士雄「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」（前掲註7）。
- 91 矢部良明『唐三彩と奈良三彩』日本の美術第408号、至文堂、2000年。
- 92 藤森栄一「奈良時代の火葬骨壺」『古代文化』第12巻第3号、古代学協会、1941年。
- 93 黒崎 直「近畿における8・9世紀の墳墓」（前掲註1）。
- 94 西 弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集、平凡社、1982年（『土器様式の成立とその背景』真陽社、1986年所収）。
- 95 桜岡正信・神谷佳明「金属器模倣と金属器指向」『研究紀要』15、群馬県埋蔵文化財調査事業団、1998年。
- 96 法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝』第12巻、小学館、1993年。毛利光俊彦『古代東アジアの金属製容器Ⅱ（朝鮮・日本編）』奈良文化財研究所史料第71冊、2005年。

- 97 町田甲一編『大和古寺大観』第1巻、法起寺 法輪寺 中宮寺、岩波書店、1977年。奈良国立博物館『仏舎利の荘厳』奈良国立博物館、1983年。
- 98 帝室博物館『天平地寶』、1937年。奈良六大寺大観刊行会『奈良六大寺大観』第9巻、東大寺一、岩波書店、1970年
- 99 山本孝文は、北部九州の骨蔵器を主に取り上げ百済有蓋短頸壺との時期的連続性を認めようとする（山本孝文「百済火葬墓에 대한考察」（前掲註9））。山本が事例として挙げた大分県宇佐市山本火葬墓群の須恵器壺Aについては、頸部の短い点・肩の張りに対し底部が小さい点などの特徴が、第8図の畿内の壺Aよりも百済の有蓋短頸壺（双北里1など）と形態的に類似するように見える。しかし、山本火葬墓群の壺Aの蓋にみられる沈線の表現や宝珠つまみ、同火葬墓群の近くに位置する宇佐市四日市町一鬼手出土壺Aの脚部の穿孔などは、小田富士雄が指摘するように、金属器模倣の結果と見るべきと考える（小田富士雄「大分県の火葬墓」、同「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」（前掲註90））。宇佐地域の壺Aの展開は、モデルとなる金属器の差異や豊前地域における須恵器生産の脈絡などを考慮する必要がある。今後の課題としたい。
- 100 日本の火葬墓にも石櫃を外容器とする事例が存在し、筆者は、これを骨蔵器の入れ子構造と同様に舍利埋納との強い関係を示すものと考え、小林義孝・海邊博史は舍利容器との関係とともに、新羅との関連を指摘する（小林義孝・海邊博史「古代火葬墓の典型的形態」『太子町立竹内街道歴史資料館報』第6号、太子町立竹内街道歴史資料館、2000年）。この中で、小林・海邊が新羅の球形石櫃に類似する形態が畿内地域には存在せず、東京都昭島市玉川町火葬墓や群馬県新里村熊野火葬墓など関東の石櫃との類似性を指摘した点は注意される。慶州周辺の花葬墓と関東の花葬墓との直接的なつながりを示す可能性がある。
- 101 藤森栄一「奈良時代の火葬骨壺」（前掲註92）。小田富士雄「日韓火葬墓の出現－扶余と九州－」（前掲註7）ほか。
- 102 河田 貞「概説」『仏舎利の荘厳』（前掲註97）。
- 103 奈良国立博物館『仏舎利の荘厳』（前掲註97）、通度寺聖寶博物館『佛舍利信仰の二荘厳』2000年。
- 104 日本では骨蔵器の選択に関しては特に規制はなく、造墓者側の経済力や仏教＝舍利信仰などの意識が反映している可能性が高い。第3表をみると、埋納施設が官位と相関し、喪葬令との関係が考えられるのに対し、骨蔵器と被葬者の官位・階層とは相関が弱く、被葬者（造墓者）側の意図が反映しやすいものと予測される。新羅では、入れ子構造をとるものの、舍利容器そのものを忠実に骨蔵器として再現するのではなく、印花文などで装飾された専用容器を用いていることから、骨蔵器の選択には仏舎利信仰以外の意識も強く投影されていたと理解できる。
- 105 和田 萃「東アジアの古代都城と葬地－喪葬令皇都条に関連して－」、金子裕之「平城京と葬地」（前掲註49）。
- 106 林 紀昭「飛鳥浄御原律令に関する諸問題」『論集日本歴史2 律令国家』有精堂出版、1973年。
- 107 「七月一日王薨。日文武。群臣以遺言葬東海口大石上。（中略）依西国之式。以火烧葬。」金思燁『完訳 三国史記』明石書店、1997年。
- 108 古代日本における新羅の影響について論じた代表的な文献として、関見「遣新羅使の文化史的意義」『山梨大学学芸学部研究報告』6、山梨大学学芸学部、1955年。鈴木靖民「日本律令国家と新羅・渤海」『日本律令国家と東アジア』東アジア世界における日本古代史講座第6巻 学生社、1982年。亀田修一「統一新羅の考古学と日本」（前掲註30）などがある。
- 109 網干善教「日本上代の火葬に関する二、三の問題」（前掲註12）。
- 110 網干善教「日本上代の火葬に関する二、三の問題」（前掲註12）。

- 111 ただし、川崎市宮前区有馬2466火葬墓の事例や、註100にあげた関東の球形石櫃のように、支配者層以外のレベルにおける新羅火葬墓の影響については十分にあり得る。
- 112 西脇常記『唐代の思想と文化』創文社、2000年。
- 113 三名田隆信「わが国上世における火葬の風習について」（前掲註20）、西脇常記『唐代の思想と文化』（前掲註112）、磯部ひろみ「隋唐代における仏教の中国化の諸相」『お茶の水史学』49、お茶の水大学文教学部読史会、2005年。西脇によると『宋高僧伝』にみられる唐代僧侶の火葬の割合は13.6%であったとする。
- 114 田村圓澄は撰論宗を伝えたとする。田村圓澄「撰論宗の伝来」『飛鳥白鳳仏教論』雄山閣出版、1975年。
- 115 道昭については、以下の文献を参考にした。藤野道生「道昭和尚の帰朝と禪院の創建」『日本佛教史』2 日本仏教史研究会、1957年。深浦正文「唯識の日本初伝と玄奘道昭の関係について」『大和文化研究』第9巻11号、大和文化研究会、1964年。中村浩「僧道昭に関する諸問題」『大和文化研究』第14巻8号、大和文化研究会、1969年。梅林久高「律令体制下における道昭の仏教思想」『仏教史学論集』二葉博士還暦記念会、1977年。石村喜英「僧道昭の火葬をめぐる諸問題」『史跡と美術』485号、史跡美術同友会、1978年。佐久間竜『日本古代僧伝の研究』吉川弘文館、1983年。
- 116 小林義孝「丙の年の人の故に焼き失わず」、同「古代の火葬と火葬墓」（前掲註2）。
- 117 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」（前掲註2）、同「日本における火葬墓の始まりをめぐる」（前掲註85）。
- 118 玄奘の入寂時の遺言として、火葬が示されている。道昭は玄奘入寂時には帰国していたものの、玄奘から火葬の思想について伝わっていたと考えられる。なお、道昭は、新羅経由で帰国したと考えられることや、飛鳥寺東南禪院の瓦に新羅的要素が多く認められることなどから、新羅とのつながりも深かったものと考えられ、新羅の仏教・火葬の状況についても理解していたものと推測される。道昭火葬の背景に新羅の火葬との関係も考える必要があるが、筆者は日本の火葬の系譜に関しては、道昭の伝えた唐代仏教の情報に基づく天皇・支配者層の主体的な選択という点を評価する。道昭と新羅との関係については高田貫太氏のご教示を受けた。
- 119 『周礼考工記』をモデルとした十条十坊の藤原京の平面プラン（小澤毅「古代都市「藤原京」の成立」『考古学研究』第44巻第3号、考古学研究会、1997年）や、銭貨の発行（松村恵司『出土銭貨』日本の美術第512号、至文堂、2009年）など当該期の国家体制の整備を意図する一連の施策と同様の脈絡として理解できると考える。
- 120 田村圓澄『古代朝鮮仏教と日本仏教』吉川弘文館、1980年。
- 121 李成市「新羅文武・神文王代の集権政策と骨品制」『日本史研究』500、日本史研究会、2004年。
- 122 山田隆文「新羅金京の形成と変遷過程」（前掲註54）。
- 123 森本 徹「韓国における初期火葬墓の研究」（前掲註2）。



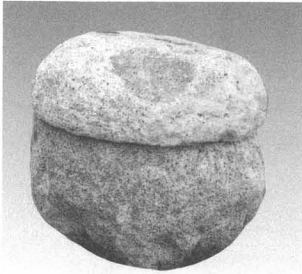
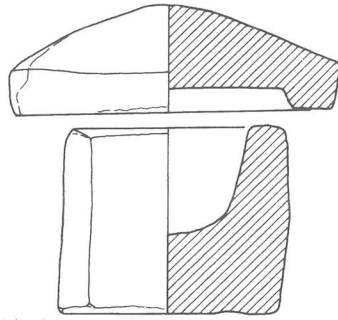
第 10 図 百濟の火葬墓



慶州出土(21)



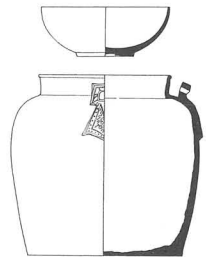
朝陽洞遺跡(15)



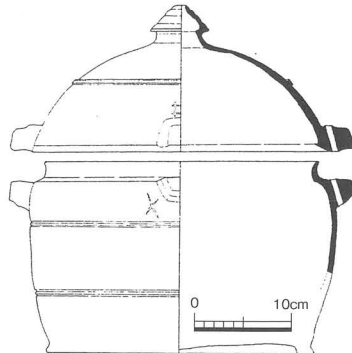
花谷里火葬墓(20)



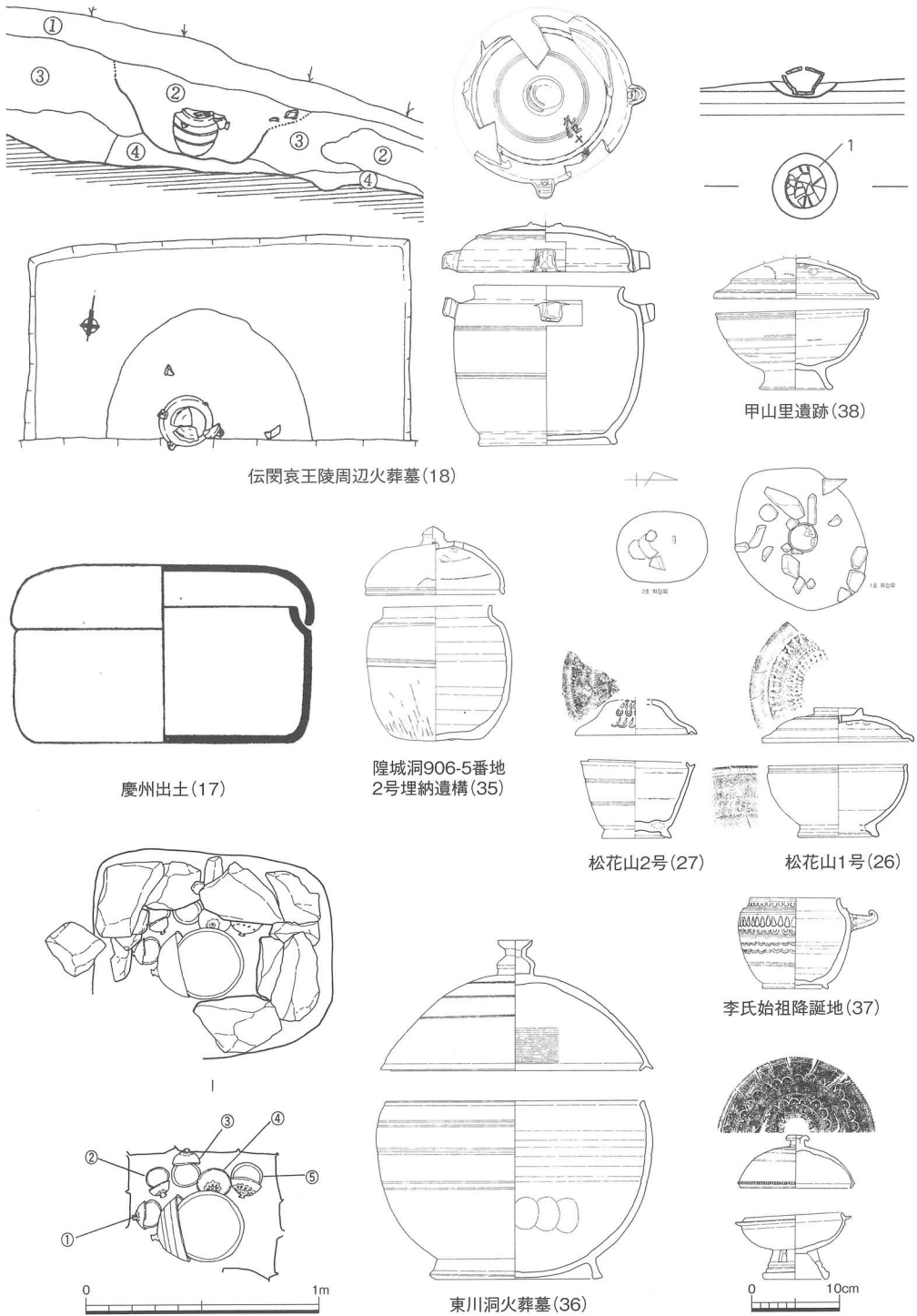
南山出土(16)



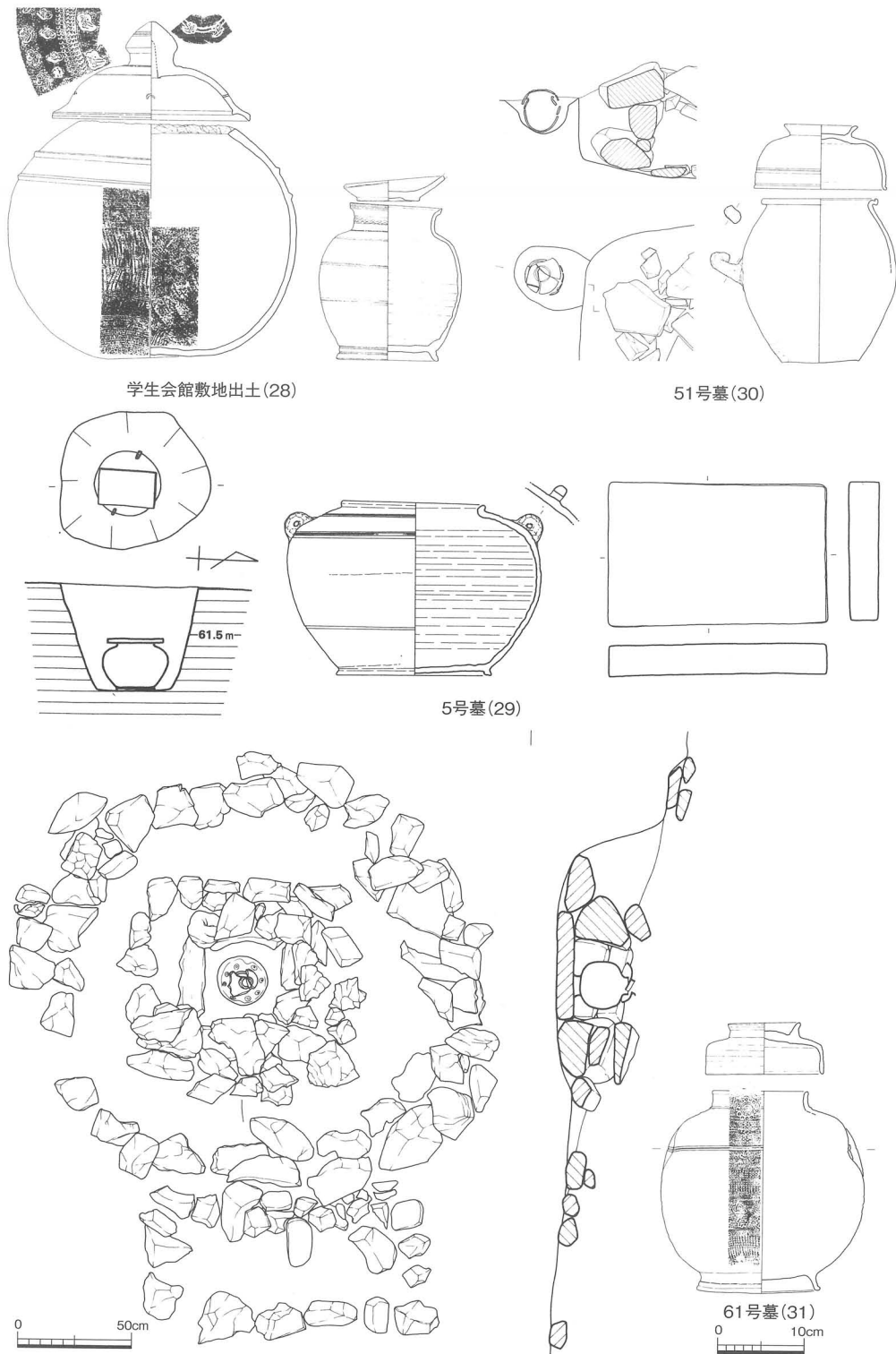
揖里三陵付近(19)



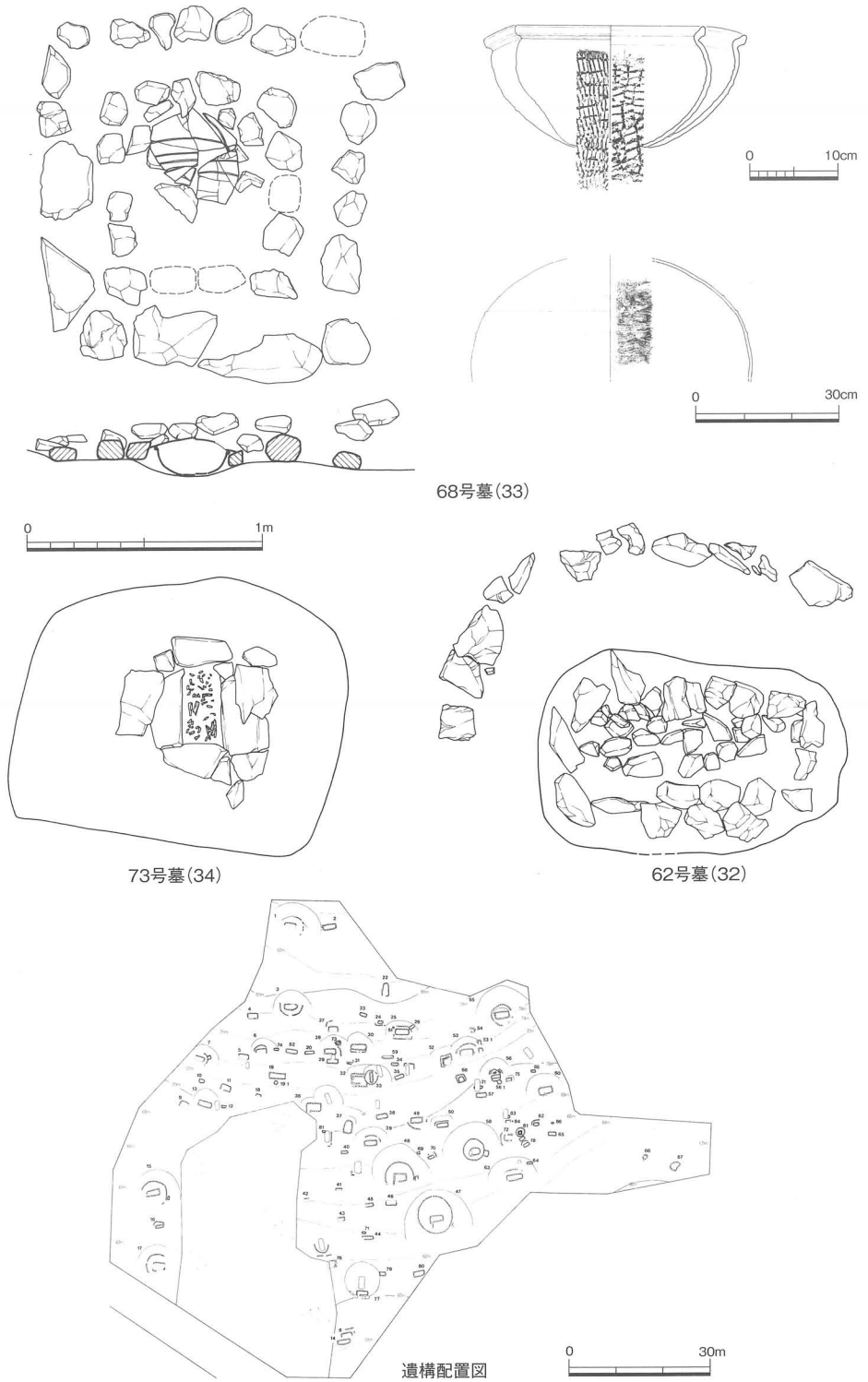
第 11 図 新羅王京周辺の火葬墓 (A1 型)



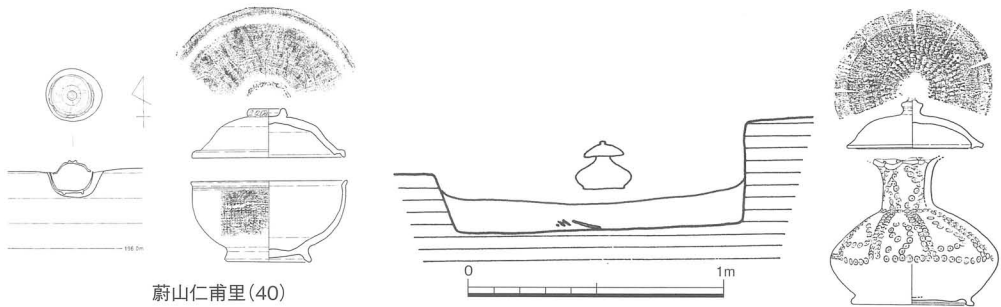
第12図 新羅王京周辺の火葬墓(B型)



第13図 新羅王京周辺の火葬墓（錫杖洞遺跡①）

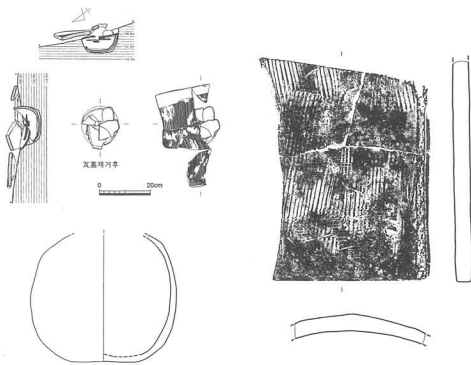


第 14 図 新羅王京周辺の火葬墓（錫杖洞遺跡②）

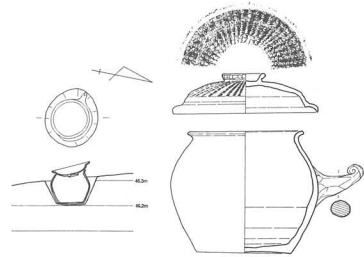


蔚山仁甫里 (40)

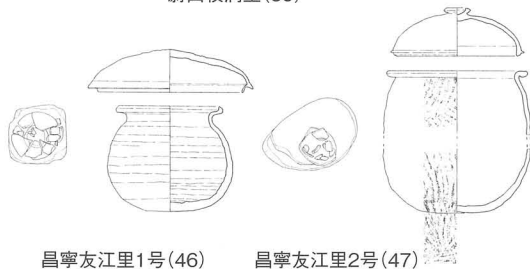
釜山蓮山洞 (41)



蔚山校洞里 (39)

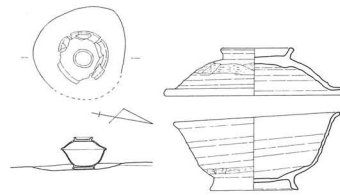


金海大清3号 (42)

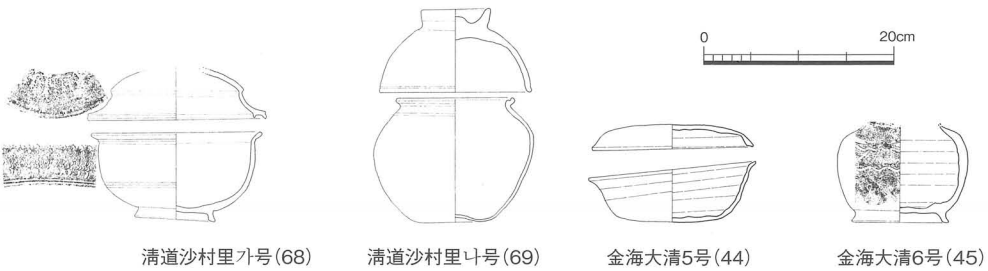


昌寧友江里1号 (46)

昌寧友江里2号 (47)



金海大清4号 (43)



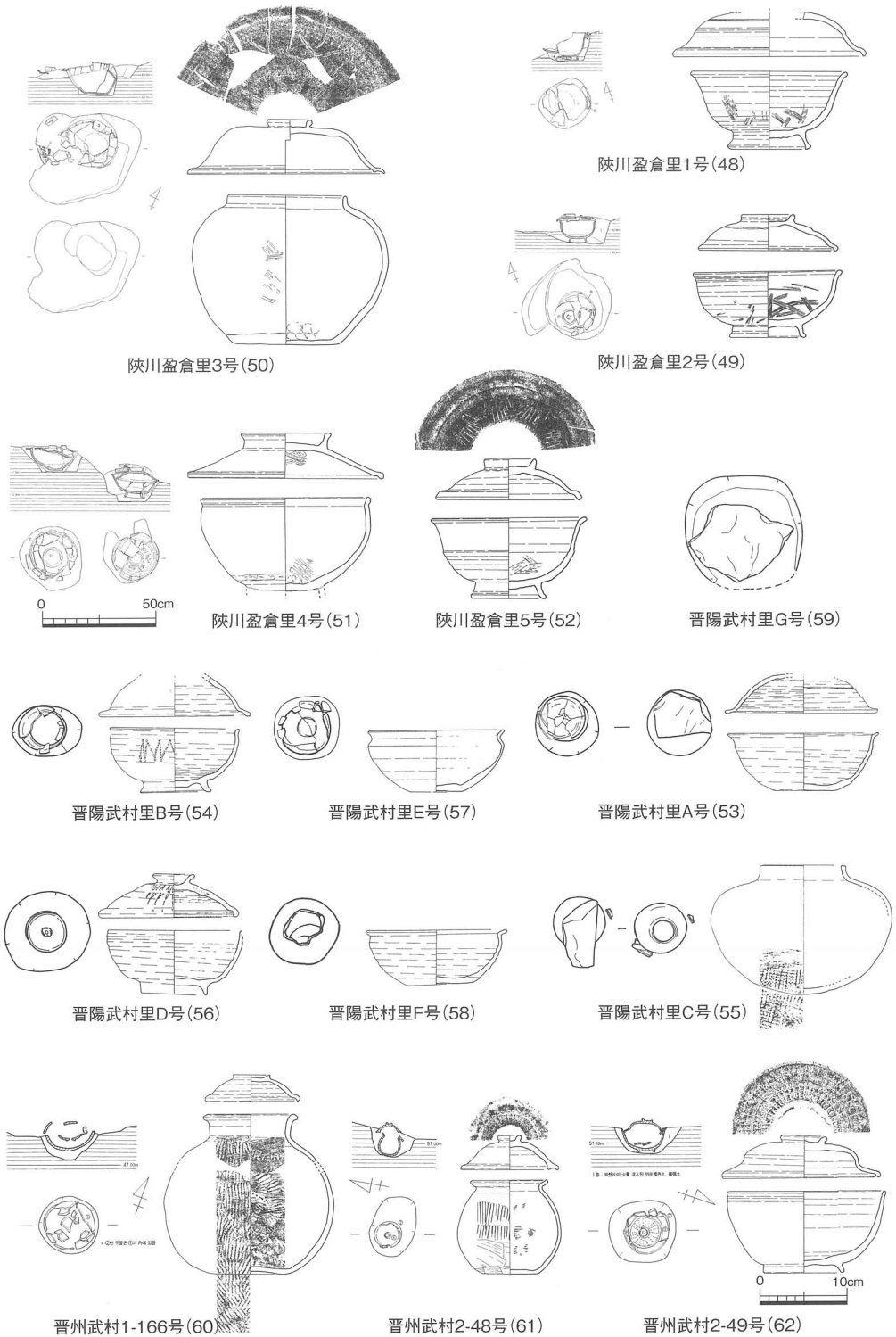
清道沙村里가号 (68)

清道沙村里나号 (69)

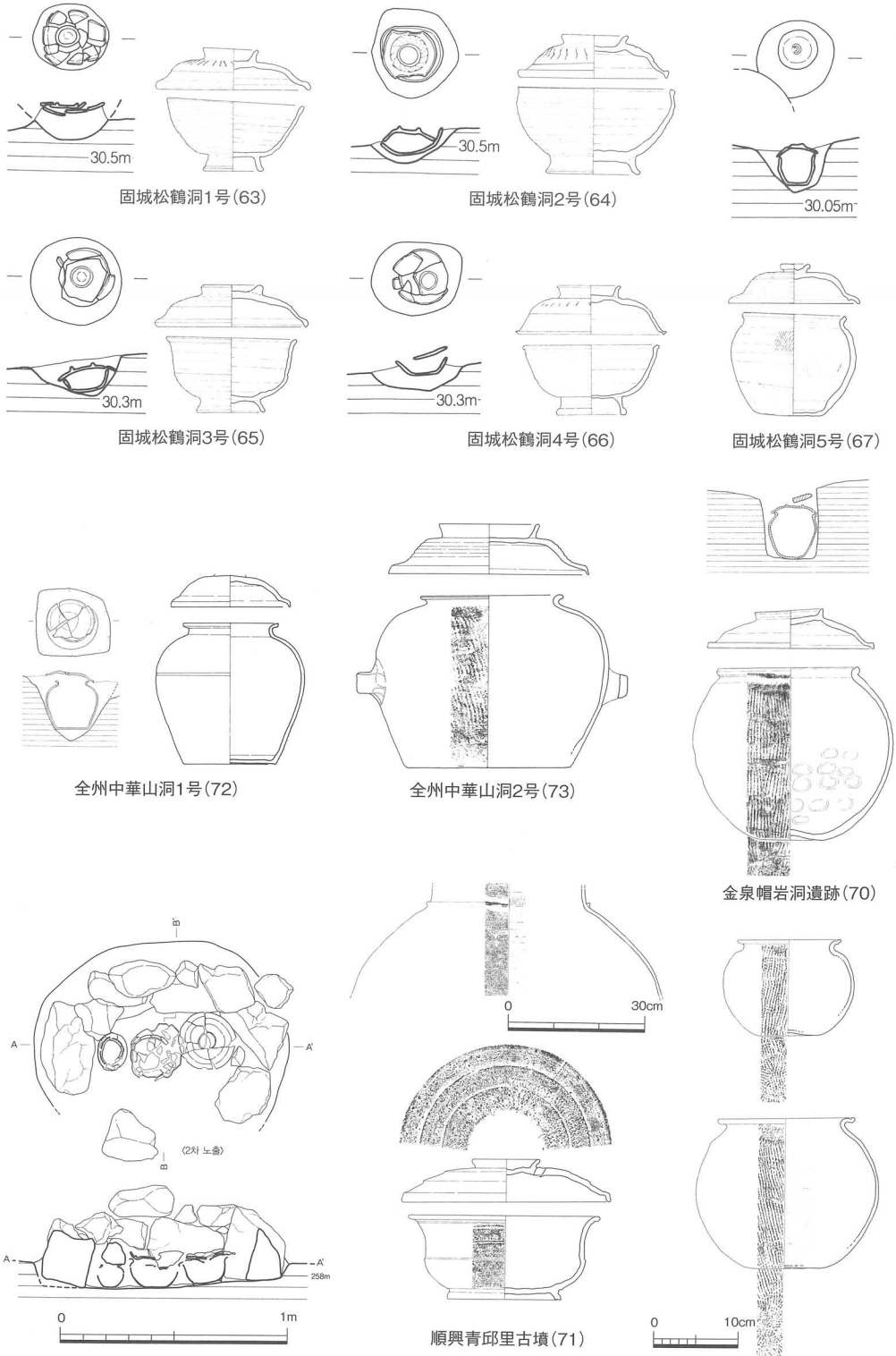
金海大清5号 (44)

金海大清6号 (45)

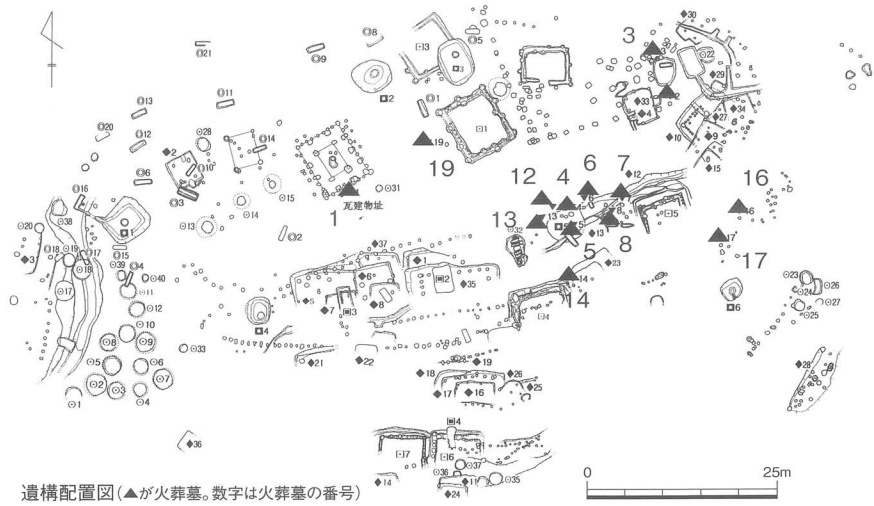
第 15 図 新羅の地方火葬墓①



第 16 図 新羅の地方火葬墓②



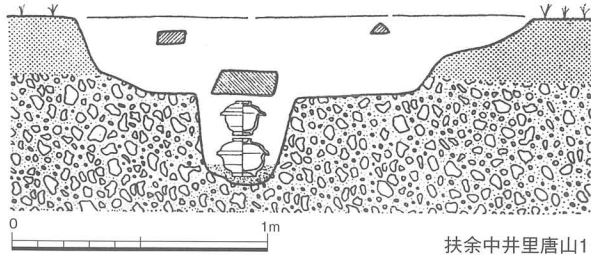
第 17 図 新羅の地方火葬墓③



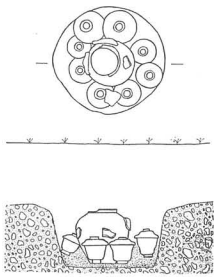
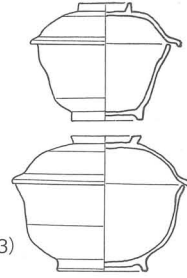
遺構配置図(▲が火葬墓。数字は火葬墓の番号)



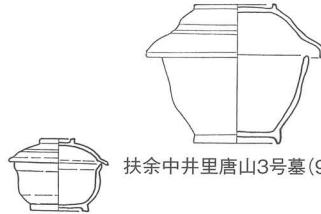
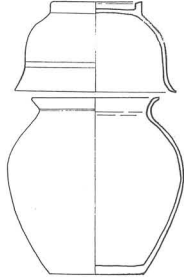
第 18 図 新羅の地方火葬墓④ (公州艇止山遺跡)



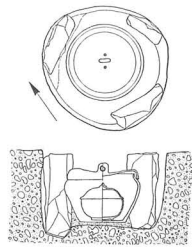
扶余中井里唐山1号墓(93)



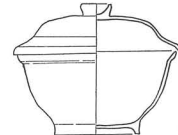
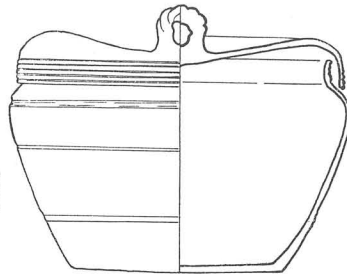
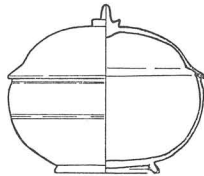
扶余中井里唐山2号墓(94)



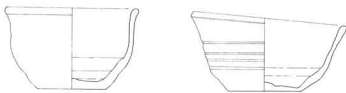
扶余中井里唐山3号墓(95) 扶余中井里唐山4号墓(96)



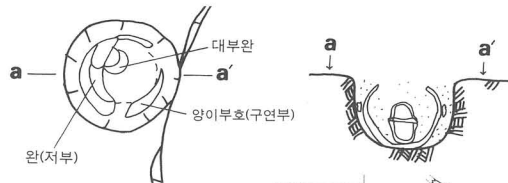
扶余上錦里(97)



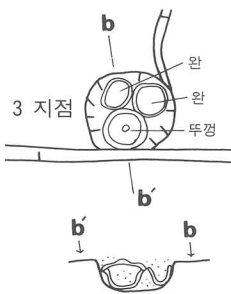
舒川文山面(101)



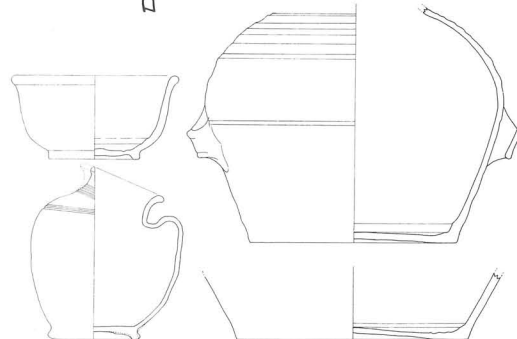
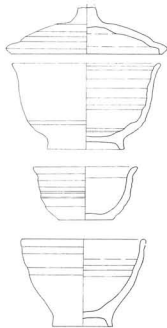
扶余花枝山B-1(98)



扶余花枝山B-2(99)



扶余花枝山B-3(100)



第 19 図 新羅の地方火葬墓⑤

分析対象遺跡関係文献(第4表参照)

- 1 齊藤忠「扶余発見の壺の一型式」『考古学雑誌』第32巻第1号、1942年。
- 2 姜仁求著・岡内三真訳『百济古墳研究』(日本語版)、学生社、1984年。原著は『百济古墳研究』一志社、1977年。
- 3 金洛中(編)『羅州伏岩里3号墳』国立文化財研究所、2001年。
- 4 慶州文化財研究所(編)『皇南大塚Ⅱ(南墳)発掘調査報告書』1993年。
- 5 三上次男「朝鮮半島出土の中国唐代陶磁とその史的意義」『朝鮮学報』第87輯、朝鮮学会、1978年。
- 6 国立慶州博物館『特別展 統一新羅』2003年。
- 7 斎藤忠「新羅火葬骨壺考」『考古学論叢』第2輯、1936年(『新羅文化論攷』吉川弘文館、1973年に所収)。
- 8 鄭良謀ほか『傳閔哀王陵周辺整備報告』国立慶州博物館、1985年。
- 9 姜敬淑「慶州拜里出土土器骨壺小考」『三佛金元龍教授停年退任紀年論叢』1987年。
- 10 国立慶州博物館『新羅의土俑』1989年。
- 11 韓炳三「土器」『雁鴨池発掘調査報告書』1978年。
- 12 有光教一「慶州忠孝里石室古墳調査報告」『昭和七年度古蹟調査報告』第2冊、朝鮮総督府、1937年。
- 13 車順喆「慶州市忠孝洞松花山玉女峯火葬墓緊急発掘調査報告」『文化遺蹟発掘調査報告(緊急発掘調査報告Ⅳ)』国立慶州文化財研究所、2009年。
- 14 李熙濬「慶州錫杖洞東国大構内出土蔵骨器」『嶺南考古学11』嶺南考古学会、1992年。
- 15 東国大学校慶州궐서스博物館『錫杖洞遺跡』1996年。
- 16 東国大学校慶州궐서스博物館「校内学生福祉館敷地遺跡Ⅰ」『錫杖洞遺跡Ⅳ』2004年。
- 17 国立慶州文化財研究所『隍城洞石室墳906-5番地』国立慶州文化財研究所、2005年。
- 18 国立慶州博物館「慶州東川洞収集調査報告」『国立慶州博物館年報1994年度』1995年。
- 19 金鎬詳「慶州李氏始祖誕降址の再検討」『慶州文化』第9号、慶州文化院、2003年。
- 20 (財)慶尚北道文化財研究院『慶州甲山里遺跡』2006年。
- 21 (財)蔚山文化財研究院『蔚山校洞里192-37遺跡』2009年。
- 22 (財)蔚山文化財研究院『蔚山仁甫里면담뜰遺跡』2008年。
- 23 宋桂鉉「東萊蓮山洞古墳群収拾遺構発掘調査報告」『博物館研究論集』2、釜山直轄市立博物館、1993年。
- 24 李在賢『金海大清遺跡』釜山大学校博物館・韓国土地公社、2002年。
- 25 慶南發展研究院歴史文化센터『昌寧友江里古墳群』2004年。
- 26 (社)慶南考古学研究所『陝川盈倉里無文時代集落』2002年。
- 27 姜吳希「晋陽武村里伽耶墓」『国立晋州博物館遺跡調査報告書』第9冊、晋州博物館、1994年。
- 28 (社)慶南考古学研究所『晋州武村Ⅲ-三国時代(Ⅰ)-』2004年。
- 29 沈奉謹(編)『固城松鶴洞古墳群』東亜大学校博物館、2005年。
- 30 金相冕「清道沙村里遺跡発掘調査報告」『考古学誌』第2輯、韓国考古美術研究所、1990年。
- 31 (財)嶺南文化財研究院『金泉帽岩洞遺跡Ⅱ』2003年。
- 32 東洋大学博物館『順興飛鳳山城周邊古墳発掘調査報告書』東洋大学校博物館、2008年。
- 33 李揆山・愈炳夏「全州中華山洞百济火葬墓」『考古学誌』第6輯、韓国考古美術研究所、1994年。
- 34 国立公州博物館『艇止山』1999年。
- 35 国立扶余文化財研究所『花枝山一帯地表調査報告書』1998年。

第4表 韓国の古代火葬墓一覽表

百済の火葬墓

No.	所在地	遺跡名	遺構名	骨蔵器	外容器	埋納施設
1	扶余	双北里	1	陶質有蓋短頸壺・蓋		
2	扶余	双北里	2	陶質有蓋短頸壺・蓋		素掘土坑
3	扶余	軍守里	1	陶質有蓋短頸壺・蓋		
4	扶余	軍守里	2	陶質有蓋短頸壺・蓋		
5	扶余	中井里		陶質有蓋短頸壺・蓋		
6	扶余	塩倉里川峰遺跡		陶質壺か	陶質壺2個体を合わせ被土坑底に平瓦を敷く。	
7	扶余	新岱里		陶質有蓋短頸壺・蓋		
8	扶余	扶余邑付近		陶質有蓋短頸壺・蓋		
9	扶余	旺(玉)浦里		陶質台付椀	陶質有蓋短頸壺・球形盒の	
10	扶余	草村面峯岩里		陶質台付椀		
11	扶余	窺岩面新里		陶質有蓋短頸壺・蓋		素掘土坑か？
12	舒川	屯德里遺跡		陶質有蓋短頸壺		小石室
13	羅州	伏岩里古墳群	3号墳17号石室	瓦形土製品		横穴式石室

新羅の火葬墓

No.	所在地	遺跡名	遺構名	骨蔵器	外容器	埋納施設
14	慶州	皇南大塚	南墳封土	印花文有蓋椀多数		封土中
15	慶州	朝陽洞出土		唐三彩三足鏡・青銅皿		石櫃
16	慶州	南山出土		緑釉印花文短頸壺	緑釉印花文短頸壺	
17	慶州	南山		箱形骨壺		切石組合石室
18	慶州	伝閑哀王陵周辺		陶質連結把手付壺		素掘土坑
19	慶州	拝里三陵付近		青磁双耳壺・青磁椀	陶質連結把手付壺	
20	慶州	花谷里火葬墓		陶質連結把手付壺		石櫃
21	慶州	慶州出土		鉛釉骨壺		球形石櫃
22	慶州	雁鴨池下層		短頸壺		
23	慶州	忠孝里古墳群	①	緑釉印花文短頸壺・蓋		
24	慶州	忠孝里古墳群	②	把手付鉢	把手付蓋被覆	
25	慶州	忠孝里古墳群	③	印花文椀B・蓋	陶質鉢被覆	
26	慶州	松花山遺跡	1号	印花文有蓋鉢・蓋		素掘土坑
27	慶州	松花山遺跡	2号	印花文椀B・蓋		素掘土坑
28	慶州	錫杖洞遺跡	学生会館敷地出土	陶質土器壺・青磁椀	印花文大型蓋・陶質大壺	
29	慶州	錫杖洞遺跡	5号火葬墓	陶質双耳短頸壺・樽		石室内に掘り込む。
30	慶州	錫杖洞遺跡	51号墓	陶質把手付鉢・陶質椀		素掘土坑
31	慶州	錫杖洞遺跡	61号墓	印花文短頸壺・蓋		小石室
32	慶州	錫杖洞遺跡	62号墓	木櫃か		小石室
33	慶州	錫杖洞遺跡	68号墓	陶質鉢・大壺		石組(小石室)
34	慶州	錫杖洞遺跡	73号墓	木櫃か		小石室
35	慶州	隴城洞石室墳906-5番地2号埋納遺構		陶質蓋・短頸壺		素掘土坑
36	慶州	東川洞火葬墓		陶質盒形容器		小石室
37	慶州	李氏始祖誕降址		印花文把手付鉢		岩穴？素掘土坑？
38	慶州	甲山里遺跡	火葬墓	陶質椀B・印花文蓋		素掘土坑
39	蔚山	校洞里192-37遺跡	火葬墓	陶質土器壺・瓦		素掘土坑
40	蔚山	仁甫里안남도遺跡	1号火葬墓	印花文椀B・蓋		素掘土坑
41	釜山	連山洞古墳群		印花文長頸壺・蓋		素掘土坑か
42	金海	大溝遺跡	3号火葬墓	陶質把手付鉢・蓋		素掘土坑
43	金海	大溝遺跡	4号火葬墓	陶質椀B・蓋		素掘土坑
44	金海	大溝遺跡	5号火葬墓	陶質椀A・皿		素掘土坑
45	金海	大溝遺跡	6号火葬墓	陶質壺		素掘土坑か
46	昌寧	友江里古墳群	1号墓	陶質甕・高杯		素掘土坑
47	昌寧	友江里古墳群	2号墓	軟質甕・陶質蓋		素掘土坑
48	陝川	盈倉里遺跡	1号火葬墓	陶質椀B・蓋		素掘土坑
49	陝川	盈倉里遺跡	2号火葬墓	陶質椀B・蓋		素掘土坑
50	陝川	盈倉里遺跡	3号火葬墓	陶質短頸壺・印花文蓋		素掘土坑
51	陝川	盈倉里遺跡	4号火葬墓	陶質台付椀・蓋		素掘土坑
52	陝川	盈倉里遺跡	5号火葬墓	陶質椀B・蓋		素掘土坑
53	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	A号火葬墓	陶質有蓋椀A		素掘土坑・石蓋
54	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	B号火葬墓	印花文椀B・蓋		素掘土坑
55	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	C号火葬墓	陶質短頸壺		素掘土坑・石蓋
56	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	D号火葬墓	印花文椀B・蓋		素掘土坑
57	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	E号火葬墓	陶質椀A		素掘土坑
58	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	F号火葬墓	陶質椀A		素掘土坑
59	慶尚南道	晋陽 武村里伽耶墓	G号火葬墓	なし。木櫃？		素掘土坑・石蓋
60	晋州	武村	1丘166号火葬墓	陶質甕・蓋		素掘土坑
61	晋州	武村	2丘48号火葬墓	軟質甕・陶質蓋		素掘土坑
62	晋州	武村	2丘49号火葬墓	印花文椀B・蓋		素掘土坑
63	固城	松鶴洞古墳	1a-4周溝1号埋納遺構	印花文椀B・蓋		素掘土坑
64	固城	松鶴洞古墳	1a-4周溝2号埋納遺構	印花文椀B・蓋		素掘土坑
65	固城	松鶴洞古墳	1a-4周溝3号埋納遺構	陶質椀B・蓋		素掘土坑
66	固城	松鶴洞古墳	1a-4周溝4号埋納遺構	印花文椀B・蓋		素掘土坑
67	固城	松鶴洞古墳	1a-4周溝5号埋納遺構	軟質甕・陶質蓋		素掘土坑
68	慶尚北道	清道 沙村里遺跡	가	印花文椀B・蓋		素掘土坑
69	慶尚北道	清道 沙村里遺跡	나	軟質甕・陶質椀		素掘土坑
70	慶尚北道	金泉 幢岩洞遺跡		軟質甕・陶質蓋		素掘土坑・石蓋？
71	慶尚北道	順興 青邱里古墳	火葬墓	印花文椀B・蓋		小石室
				軟質甕		

伴出遺物	埋置方法	時期	構造類型	備考	図	文献
五銖銭11	正置	6世紀後半～7世紀			10	1
開元通宝(621年初鑄)2	正置	6世紀後半～7世紀		寺址か?	10	2
		6世紀後半～7世紀			10	2
	正置	6世紀後半～7世紀		軍守里廩寺付近	10	2
		6世紀後半～7世紀			10	1
	正置			内壺外甕式。詳細不明。	-	2
		6世紀後半～7世紀			10	1
		6世紀後半～7世紀			10	1
		6世紀後半～7世紀			10	1
		6世紀後半～7世紀			10	2
開元通宝(621年初鑄)5	正置	6世紀後半～7世紀		石室墳の封土内か。	10	2
陶質蓋	正置	7世紀か		共同墓室?	10	2
		7世紀前半～		石室羨道内。火葬骨出土。	10	3

伴出遺物	埋置方法	時期	構造類型	備考	図	文献
	正置	7世紀後半～8世紀代	B2	火葬墓か。	-	4
	正置	8世紀中頃	A1	唐三彩は黄冶窯産。青銅皿を蓋に転用	11	5
		7世紀後半	A1		11	6
			B1		12	7
	正置	「元和十年(815)」銘。	B2		12	8
土製十二支像	正置	9世紀前～中	A1	青磁椀を蓋に転用。青磁は長沙銅官窯	11	9
	正置	9世紀初	A1		11	10
			A1		11	6
開元通宝				地鎮具・鎮壇具の可能性高い。	-	11
					-	12
		8世紀初～前	A2		-	12
		7世紀末～8世紀初	A2		-	12
	正置	7世紀中	B2		12	13
	正置	8世紀初～前	B2		12	13
	正置	9世紀前～中	A2	外容器頸部・青磁椀口縁打ち欠き。	13	14
	正置	8世紀	B2		13	15
	正置	8世紀初～前	B2	石室墳と重複。寄せ集め。	13	16
	正置	8世紀前半	B1	護石施設あり。前面に方形区画。	13	16
			B1	周囲に護石か。	14	16
	正置	8世紀	B1	護石施設あり。大壺を破砕し、蓋とする。	14	16
			B1		14	16
陶質有蓋高杯5セット	正置	9世紀前半	B2	石室は7世紀中葉	12	17
	正置	6世紀後半	B1	石室墳と重複。火葬墓が古い。	12	18
		7世紀後半	B2	風化岩盤に掘り込む。	12	19
	正置	8世紀前半	B2		12	20
	正置	8世紀	B2	瓦被覆。壺は元々口縁部まであった。	15	21
	正置	8世紀初	B2		15	22
	正置	7世紀後半	B2	土墳墓と重複。長頸壺頸部打ち欠き。	15	23
	正置	8世紀初	B2		15	24
	正置	8世紀中～後	B2		15	24
	正置	8世紀後半	B2		15	24
	不明	8世紀後半～		表土出土。	15	24
	正置	6世紀後半～	B2	高杯杯部を蓋に転用。	15	25
青銅塊・鉄塊	正置	6世紀後半～7世紀前	B2		15	25
	正置	8世紀後半	B2		16	26
	正置	8世紀後半	B2		16	26
	正置	7世紀後半～末	B2		16	26
	正置	8世紀後半	B2		16	26
	正置	8世紀後半	B2	椀高台を打ち欠く。	16	26
	正置	8世紀後半	B2	蓋に施文あり。椀高台一部打ち欠き?	16	26
	正置	8世紀	B2	椀を蓋に転用。	16	27
	正置	8世紀初～前	B2		16	27
	正置	8世紀	B2	壺胴部に穿孔。	16	27
	正置	8世紀前半	B2		16	27
	正置	8世紀	B2		16	27
	正置	8世紀	B2		16	27
	正置	8世紀前半	B2		16	27
		正置	8世紀前半	B2		16
	正置	8世紀初	B2		16	28
	正置	8世紀前半	B2		16	28
	正置	8世紀後半	B2		17	29
	正置	8世紀後半	B2		17	29
	正置	8世紀後半	B2		17	29
	正置	8世紀後半	B2		17	29
	正置	8世紀前半	B2		17	29
	正置	8世紀前半	B2		17	29
無	正置	8世紀前半	B2		15	30
	正置	8世紀	B2		15	30
	正置	8世紀前～中	B2		17	31
陶質大壺片	正置					
	正置	8世紀前～中	B1	3基が1基の小石室内に入る。破砕した大壺で被覆する。	17	32

72	全州	全州	中華山洞	1号墓	陶質壺・蓋	素掘土坑
73	全州	全州	中華山洞	2号墓	陶質把手付壺・蓋	素掘土坑か
74	公州	公州	艇止山遺跡	1号火葬墓	陶質椀A・滑石製蓋	素掘土坑
75	公州	公州	艇止山遺跡	2号火葬墓	陶質蓋・有機質?	素掘土坑
76	公州	公州	艇止山遺跡	3号火葬墓	印花文土器有蓋鉢・蓋	素掘土坑・石?
77	公州	公州	艇止山遺跡	4号火葬墓	陶質椀B・蓋	素掘土坑
78	公州	公州	艇止山遺跡	5号火葬墓	陶質蓋・有機質?	素掘土坑
79	公州	公州	艇止山遺跡	6号火葬墓	印花文椀B・蓋	素掘土坑
80	公州	公州	艇止山遺跡	7号火葬墓	印花文椀B・蓋	素掘土坑
81	公州	公州	艇止山遺跡	8号火葬墓	印花文椀B・蓋	素掘土坑
82	公州	公州	艇止山遺跡	9号火葬墓	陶質小壺・滑石製蓋	素掘土坑
83	公州	公州	艇止山遺跡	10号火葬墓	陶質椀B・蓋	
84	公州	公州	艇止山遺跡	11号火葬墓	陶質蓋・有機質?	素掘土坑
85	公州	公州	艇止山遺跡	12号火葬墓	陶質椀A・蓋	素掘土坑
86	忠	公州	艇止山遺跡	13号火葬墓	印花文椀A・蓋	素掘土坑
87	清	公州	艇止山遺跡	14号火葬墓	印花文椀B・蓋	素掘土坑
88	南	公州	艇止山遺跡	15号火葬墓	印花文椀B	素掘土坑
89	道	公州	艇止山遺跡	16号火葬墓	陶質蓋・有機質?	
90	公州	公州	艇止山遺跡	17号火葬墓	印花文椀B・蓋	小石室か
91	公州	公州	艇止山遺跡	18号火葬墓	陶質蓋・有機質?	素掘土坑
92	公州	公州	艇止山遺跡	19号火葬墓	印花文椀A・蓋	
93	扶余	扶余	中井里唐山遺跡	1号墳	陶質椀B・蓋	素掘土坑・蓋石
94	扶余	扶余	中井里唐山遺跡	2号墳	陶質壺・大椀	素掘土坑
95	扶余	扶余	中井里唐山遺跡	3号墳	陶質椀B	素掘土坑
96	扶余	扶余	中井里唐山遺跡	4号墳	陶質椀B	素掘土坑
97	扶余	扶余	上錦里遺跡		陶質有蓋壺・蓋	板石組
98	扶余	扶余	花核山B地点	1地点	陶質椀A	素掘土坑
99	扶余	扶余	花核山B地点	2地点	陶質壺・椀B	素掘土坑
100	扶余	扶余	花核山B地点	3地点	陶質椀B・蓋	素掘土坑
101	舒川	舒川	文山面		陶質椀B・蓋	素掘土坑

挿図出典

第1図：佐藤興治「三国都城研究の現状」『古代日本と朝鮮の都城』2007年より転載。一部改変。

第2・4・5図：筆者作成

第3図：註66文献より転載。一部改変。

第6図：註79文献、註5文献より転載。

第7図：小治田安麻呂墓；角田文衛「小治田安萬侶の墓」『古代文化』第31巻7号1979年、袖之内火葬墓：置田雅昭（編）『奈良県天理市袖之内火葬墓』埋蔵文化財天理教調査団1983年、太安萬呂墓：前園実知雄（編）『太安萬呂墓』奈良県立橿原考古学研究所1981年、文祢麻呂墓；飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977年、泉森皎「文祢麻呂墓」『奈良県遺跡調査概報1981年度』1983年、出屋敷2号墓；前坂尚志（編）「出屋敷遺跡」『五條の歴史と文化』市立五條文化博物館1996年、拾生古墓；帝室博物館『天平地寶』1937年、雁多尾畑49支群1・2号墓；桑野一幸（編）『平尾山古墳群-雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書-』柏原市教育委員会1989年

第8図：1；註96毛利光文献、2；奈文研「西方官衙地区の調査 第72次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』1994年、3；奈文研「石神遺跡第3次調査」『同調査概報14』1984年、4；奈文研「右京十条一坊西北坪の調査」『同調査概報14』1984年、5；飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977年

第9図：飛鳥資料館『日本古代の墓誌』1977年、国立慶州博物館『特別展 統一新羅』2003年

第10図：註9文献、註5文献、金洛中（編）『羅州伏岩里3号墳』国立文化財研究所2001年より転載。一部改変。

第11図：国立中央博物館『特別展 統一新羅』2003年、国立中央博物館『NATIONAL MUSEUM OF KOREA』2005年、註100文献、国立慶州博物館『新羅斗土俑』1989年、姜敬淑「慶州拜里出土土器骨壺小考」『三佛金元龍教授停年退任紀年論叢』1987年より転載。一部改変。

第12図：鄭良謀ほか「傳閔哀王陵周辺整備報告」国立慶州博物館1985年、(財)慶尚北道文化財研究院『慶州甲山里遺跡』2006年、註15文献、国立慶州文化財研究所『隍城洞石室墳906-5番地』国立慶州文化財研究所2005年、車順喆「慶州市忠孝洞松花山玉女峯火葬墓緊急発掘調査報告」『文化遺蹟発掘調査報告(緊急発掘調査報告Ⅳ)』国立慶州文化財研究所2009年、金鎬詳「慶

	正置	8世紀前半	B2	報告では6c末～7c初とするが、統一新	17	33
	正置か	8世紀前半	B2	羅時代。	17	33
	正置	II	B2	7世紀末～8世紀後半の火葬墓群	18	34
		II			18	34
	正置	I	A2		18	34
	正置	III	B2		18	34
		III	B2		18	34
	正置	I	B2		18	34
	正置	III	B2		18	34
	正置	II	B2		18	34
	正置		B2		18	34
		III			18	34
		III			18	34
	正置	II	B2		18	34
	正置	III	B2		18	34
	正置	II	B2		18	34
		III			18	34
		III			18	34
	正置	I	B1		18	34
	正置	III	B2		18	34
		II			18	34
陶質椀B・蓋	正置	8世紀前～中	B2	二重椀式。	19	2
陶質有蓋椀A・椀B・蓋 8セット	正置	8世紀前～中	B2	心壺多椀式	19	2
		8世紀後半	B2	単椀式。	19	2
陶質椀B		8世紀後半～	B2	単椀式。	19	2
	正置	7世紀後～8世紀初	B1	外壺内壺式。	19	2
陶質椀A	正置	9世紀	B1	椀に穿孔の可能性あり。	19	35
壺底片	正置	9世紀	A2		19	35
陶質椀A・椀B	正置	9世紀	B2		19	35
		8世紀後半		詳細不明	19	2

州李氏始祖誕降址의再検討』『慶州文化』第9号 慶州文化院 2003年、国立慶州博物館「慶州東川洞取拾調査報告」『国立慶州博物館年報 1994年度』1995年より転載。

第13図：李熙濬「慶州錫杖洞東国大構内出土蔵骨器」『嶺南考古学 11』嶺南考古学会 1992年、東国大
 学校慶州캄포스博物館『錫杖洞遺跡』1996年、東国大学校慶州캄포스博物館「校内学生福祉
 館敷地遺跡I」『錫杖洞遺跡IV』2004年より転載。

第14図：東国大学校慶州캄포스博物館「校内学生福祉館敷地遺跡I」『錫杖洞遺跡IV』2004年より転載。
 一部改変。

第15図：(財)蔚山文化財研究院『蔚山校洞里 192 - 37 遺跡』2009年、(財)蔚山文化財研究院『蔚山
 仁甫里면담을遺跡』2008年、宋桂鉉「東萊蓮山洞古墳群取拾遺構発掘調査報告」『博物館研
 究論集』2 釜山直轄市立博物館 1993年、李在賢『金海大清遺跡』釜山大学校博物館・韓国
 土地公社 2002年、慶南發展研究院歴史文化센터『昌寧友江里古墳群』2004年、金相冕「清
 道沙村里遺跡発掘調査報告」『考古学誌』第2輯 韓国考古美術研究所 1990年より転載。

第16図：(社)慶南考古学研究所『陝川盈倉里無文時代集落』2002年、姜昊希「晋陽武村里伽耶墓」『国
 立晋州博物館遺跡調査報告書』第9冊晋州博物館 1994年、(社)慶南考古学研究所『晋州武
 村Ⅲ-三国時代(I)-』2004年より転載。

第17図：沈奉謹(編)『固城松鶴洞古墳群』東亜大学校博物館 2005年、李揆山・愈炳夏「全州中華山洞
 百濟火葬墓」『考古学誌』第6輯 韓国考古美術研究所 1994年、(財)嶺南文化財研究院『金
 泉帽岩洞遺跡II』2003年、東洋大学校博物館『順興飛鳳山城周邊古墳発掘調査報告書』東洋
 大学校博物館 2008年より転載。

第18図：註73文献より転載。一部改変。

第19図：註5文献、国立扶余文化財研究所『花枝山一帯地表調査報告書』1998年

한일 고대火葬墓의 비교연구
- 일본 고대火葬墓의 系譜를 둘러싸고 -

小田裕樹 (오다 유키)

요 지 본고에서는 일본의 고대火葬墓 계보를 분명하게 하는 것을 목적으로 한반도의 火葬墓에 대해서 구조·분포·시기에서 양상을 정리하고 일본과의 비교를 했다. 百濟에서는 骨藏器를 사용한 기종이 적은 점과 나성 내에 火葬墓가 분포하는 점이 특징이지만 종래 생각되어져 온 것보다도 火葬은 성행하지 않았던 것으로 보인다. 新羅에서는 新羅王京周邊에 특수한 구조를 가지는 火葬墓가 분포하는 점이 특징이고, 地方에서는 王京과 다른 지역성이 분명하게 보인다. 일본 火葬墓와의 관계에 대해서 百濟의 火葬墓는 시기적인 연속성에 문제가 있어 적극적인 평가는 할 수 없다. 한편 일본과 新羅와의 사이에는 지배층의 火葬墓의 구조를 비교하면 양국이 모두 독자의 骨藏器와 埋納시설을 채용하고 있어 직접적인 관계를 상정하기가 어렵다. 하지만 한일 모두 무덤 구조 있어 「佛敎思想」과 「律令制度」가 공통의 배경으로서 존재하고 있었던 것으로 보이며, 그 근원은 중국(唐)에서 찾을 가능성이 높다고 생각된다. 일본 고대의 火葬은 律令國家의 성립기에 중국에서 선진문화의 하나로 律令制度和 불교를 함께 수용하고, 律令國家에 어울리는 葬法이라는 위치를 부여해서 지배층에 채용되었을 것이라 생각된다.

주제어 : 火葬墓 墓構造 도성의 葬地 지역성 律令國家

Comparative Study of Cremation Burials in Ancient Korea and Japan: A Search for the Origins of Cremation in Japan

Oda Yuki

Abstract: This contribution reviews the tomb structure, distribution, and ages of cremation burials on the Korean peninsula, and makes a comparison with Japan, in order to clarify the origins of ancient Japanese cremations. Baekje is characterized by a paucity of vessel types used for cremation urns, and the placement of cremation burials within the capital, but cremation is seen to have been less commonly conducted than traditionally thought. Silla is distinguished by the distribution of cremation burials with a unique tomb structure in the vicinity of the royal capital, but outlying areas are seen to have regional characteristics differing from those of the capital. With regard to connections with Japanese cremation burials, for Baekje there is a problem of temporal continuity for its cremations, and positive assessment is not possible. On the other hand, for Silla and Japan, in comparing the tomb structure of cremation burials of the ruling classes, both countries adopted unique cremation urns and burial facilities, so a direct connection is difficult to discern. But Buddhist philosophy and the *ritsuryō* legal system can be seen as common background for both situations, and sources of these are most likely to be found in Tang China. Cremation in ancient Japan was received from China, as one element of advanced culture along with Buddhism and the *ritsuryō* system, at the time of establishment of the *ritsuryō* state, and is thought to have been adopted by the elite as a mortuary practice thought suited to a state based on formal legal codes.

Keywords: Cremation burials, tomb structure, cemeteries in capitals, regional characteristics, *ritsuryō* state